
だいじなだいじなわたしのぱんつ

褐色さん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

だいじなだいじなわたしのぱんつ

【Nコード】

N9916W

【作者名】

褐色さん

【あらすじ】

ハンター世界に性別を変えてまで転生してしまった主人公。うる覚えの漫画にあこがれて続けていた10年にもわたる修行と、とある事件で受けたショックから手に入れた能力はとんでもないものだった。…え？こんな能力でどうしろって言うのです？by主人公。はたして彼女はその能力でこの弱肉強食の世界で生き抜いていけるのか？そんな話。この小説はarcadiaにも投稿しております。

第1話 報われた苦勞の結果

いやー困りました。ホント困りました
もちろん大事なことなので二回言いますよ？

「…ハアハア。なあ、もういいだろ？もう俺さ、もう我慢できねえよ。もうマジで…ひひ、ひひひ」

「ちっ、したねえな、見えるところには痕のこすなよ？大事な大事な人質様だ」

「んー！んっー！」

ただいまぜっさん誘拐され中です。

手足はしばられていて痛いですし、手拭いかまされて息苦しいです。そのうえたつたいまから貞操の危機という状況まで追加されそうです。

この世界の治安が悪いことは知っていたはずなのですがやっぱり知識と経験は別物ということですね。

さすがハンター×ハンター。転生してきたわたしにも容赦ありません。

さて、ここはやっぱりあれですね。みんな大好き現実逃避、これしかないでしょう。

思い起こすはわたしの今世。尺はながめに生まれたころから。

天井のしみを数えてれば終わるってよくいいますし、ぼーっとしてれば、そこまでのダメージは受けられないはず。

…つけないと、いいなあ…。

もと男なもので、貞操の危機つていまいち実感わかないのですよね。まあなにはともあれ、回想はいりますね。

わたしがここハンター×ハンターの世界にきてしまったてからはや16年、憑依とかじゃなくてちゃんと赤ん坊から始めたので

いまでは現実でいうところの高校のようなところに通っています。

2歳くらいまでは前世の記憶に赤ん坊の脳みそが釣りあわなかったのか、

その頃のことは今ではいろいろとうろ覚えですけど、ちゃんと前世の記憶を意識できるようになってからは前との違いにとまどったものです。

背の丈が低いので見える景色がなにかと新鮮でしたし、前世と違って今回は女の子だったことなどなど、例をあげればきりもありません。

いやなつかしい。

幸いなことに生まれたおうちはそれなりに、いやかなり裕福だったようで、生活に不自由を感じたことはありませんでした。

まわりにはメイドさんはもちろん、わたし専属の執事さんまでいる始末。

まあ、お仕事で忙しい両親とはめったに会うことはできませんでしたが、使用人のみんながいたので特にさびしく思うこともありませんでしたし。

そのかわりに、とってはなんですがつつけはずいぶんと厳しくつけられました。

そりゃ人からみたらちよつといいとこのお嬢様ですからね。

ふと”おれ”とか言っちゃったときのメイド長のあの目と声は今でも忘れられません…。

ふだんはちょっときつめの口調でもこちらを想ってくれてるいいことがわかる、わたしの大好きなおばあちゃんでしたのに、一瞬でわたしが世界で一番悪いことしているような気持ちにさせてくれるあの眼はいつ思い出してもあばばばbbb…

…っと、いけませんね。とりみだしました。

おかげさまでいまでは頭の中でも一人称が“わたし”で固定されるくらいまで女の子の子させてもらっています。

もと男としてはせめて僕っ子で…くらいの矜持があったはずなのですが、すっかり叩き潰されちゃいました。よかったのやらわるかったのやら。

ちなみにこの世界がハンター×ハンターのものであるとわかったのは5歳のころです。

なにゆえって、いやね？

はやったのですよ。

ハンターごっこが。

幼稚園の子たちの中で。

幼稚園とはいえ、すでにおしとやかさをかねそろえ始めたお嬢様がたととはちがつて、男の子たちはたとえお坊ちゃんだろうと男の子なのですよね。

最初はハンター？ 獵師？ くらいにおもっていたのですが、元気にあそんでいるのをなんとなしに眺めていたら、やれ俺はブラックリストハンターになって賞金首がどうのとか、やれ僕はグルメハンターになっておいしいものをみんなにとかハンターの定義がどうにもデジャブを感じるようなものばかりでした。

ネテロ会長という名前が出て来たときにとっさに、ちょっとまってください！と言っていろいろと問い詰めてしまっても仕方ないと思

うのです。

あまりに迫りすぎて、気の弱い子が泣き出してしまったときはさすがにあわてましたけど。

…あのときはごめんなさい。あの子、元氣かなあ、

そんなこんなで家に帰ってからもいろいろと調べた結果、ああやっぱりここはあの世界なんだなあと。

地名なんかを調べてみるとうろ覚えの知識と一致するものばかり。ヨークシンとかはさすがにそのころでも聞いたこともありましたが、まさか転生先が漫画のなかとは思ってなかったので普通にスルーしていました。

さて、この世界の治安が世紀末的とはいわずともかなり悪いのは皆さんご存じのはず。

なにせ、おおつぴらに暗殺で生計が立てられる人々がいるのですからいわずもがな、ですよね。

そこで、わたしがお嬢様のお稽古のひとつとして、なにか武術を教えてくださいと頼み込んだところ、お家の敷地の中に道場が建ちました。

お金持つてすごいですね。

道場ではなんだか有名ならしい武術家さんに、なんだかテコンドーともカポエラともつかない足技主体な武術を教わっています。

どうせならほんとうは心源流がよかったのですが、お父様のご友人なのだとか。

こればかりはどうにもしようがありません。

ときおり訪ねてくるほかの門下生との組み手からすると、わたしの強さはおおむね中の下から中の中といったところですか。

どうやらわたしに武術の才能はあまりないようです。

しかしそこで忘れてはいけないもう一つ。

習得してしまえば、へたな武術の達人にだって余裕で無双できるであろう、それこそがこの世界を特殊たらしめる“念”の存在です。

そんな“念”の修行ですが、やはり初めは“オーラ”を感じる事ができないとどうしようもないということで、あいた時間をひたすら黙想にあてることにしました。

怪しまれるといけないので、座禅などはせず、イスにこしかけひたすら集中、しゅうちゅう、シュウチュウ…。

見えないなにかを感じるために意識を静めつけました。

そんな小さなことから始めた修行ですが、それから10年ほどたったいまでは基本の錬や絶にくわえ応用の周とか円とかその他もろもろ全部完璧で

発の“とある少年の黒歴史”^{エンターナルフォーススプリザード}で相手は死ぬから私はこの世で最強になった。スイーツ（笑）。

…いやここはオリ主（笑）のほうがいいかな？

本当に最強（笑）ならよかったですですが現実はそう甘くはありませんでした。

師匠なし、修行方法もあいまいでうまくいくはずもなく、最近になってようやくとなんか体のまわりに薄いもやがみえるような、みえないような…くらいにまでなりました。

某ビフォーアフターとは正反対な意味で劇的な変化量ですね。

逆に10年もの間あきらめなかつたわたしにびっくりです。

よくがんばりましたわし。

すごいぞつよいぞかつこいいい！

…自画自賛ってむなしくなりますね。

まあこんなかんじで“念”のほうの才能は武術以上に乏しいようです。

せっかくこの世界に来たというのに…残念で仕方ありません。ですがこのまま根気よく修行をつづければきつともう10年で錬、さらに10年で発くらいはできるようになるでしょう。

いまからどんな念能力をつくるのか楽しみですよ。

ある程度身を守れてかつ日常生活がたのしくなるような、そんな能力がいいですね。

ビスケさんのように美容や健康に全力で挑むのもおもしろいかも思いませんし、シズクちゃんのような便利な道具をつくるのも想像力がかきたてられます。

そもそもわたしの系統ってなんなのでしょう？

おもしろい能力をつくるならやっぱり具現化系とか操作系ですよ。あ、放出系の瞬間移動なんてのもすてがたいです。

でも強化系はいただけません。

能力つかってもせいぜい殴る蹴るくらいでしょうしどうせ。

ちよつとたかのぞみですが、もし、本当にもし特質系とかだったらどうしましょう？

ほぼなんだってできるともいわんばかりのチート系統。

ああ、まずいです。ゆめが無限にひろが

ゾクッ。

え？

「…ハアハア…へへへ、なあ嬢ちゃん、やわらけえなあ。ひひ、

やわらけえよお、嬢ちゃんのおっぱい。」

なに、これ。うそ。なんで？まだハジマツテなかったの？あんなにいっぱいカンガエテタノニ？

「…どうだ？なあ嬢ちゃんどうだ？…気持ちいいか？…気持ちいいんだろっ？」

「ひうつ。ひゅ。」

やめて、やめてやめてやめて！さわらないで！さわっちゃやだ！

うそでしょ！？なんで、なんでこんなにキモチワルイノ！？イキガウマクデキナイ！

「ああ、いいぜ。ホントいい。ほら、おなかもすべすべだ。」

「っ！」

ゾワッ

やだよきいてない。きいてないよ。

直接、ただ直接、肌に触れられただけなのに、服の上からよりも何倍も、何十倍も何百倍もキモチワルイ。

いやそれだけじゃない。

いまさらになつてわたしのなかのわずかな“男”に押さえつけられていた“女の本能”が警告をあげる。

シャツをたくられるだけで意識が騒ぐ。

からだを視姦されるだけで心が叫ぶ。

ただひたすらに、コワイ。

「…おい、さっさと終わらせろ。やっこさんがいつ金もってくつか

わかんねえんだ。」

「ちっ、わかつたよ。…って、おいおい、おもらししてんじゃねえか。ひひっ、そうかあ、そうかあ、そんなにこわいのかあ。なあ、嬢ちゃん？」

安心していいぜ？おれあ仲間内じゃテクニシャンでとおってんだ。へへ、だいじょうぶ。すぐに気持ち良くなれるからなあ。」

「…ひゅぐ、ひゅ、ううう。」

とうとう目から涙があふれてきた。

鼻水もたれているのがわかる。

もう顔はいろんな液でぐしゃぐしゃだろう。

男にいわれて初めて気がついたがいつの間にか失禁までしているらしく、腰のあたりがつかめたい。

からだがふるえる。

鳥肌が立つつ。

自分のからだ、目の前の男、今の状況、世界のすべてがわたしのことを虐める。

「ハアハア。それじゃあ、そろそろ…、いいよなあ…？」

男がわたしのスカートをまくりあげて、とうとう下着に指をかけた。息が詰まる。

男が唾をのんだ音がはつきりと聞こえる。

“外側”。服の上からさわられただけで、寒気をおぼえた。

“表面”。はだに直接ふれられただけで、恐怖にふるえたあと残っているのは“内側”だけ。

“外”と“表面”であれだけのことがあった。

ならばもし、“内”まで犯されたのなら、はたしてわたしはどうなるのだろうか？

そう思った。考えてしまった。想像して、しまった。

いやだいやだいやだいやだいやだいやだいやだいやだいやだいやだ
いやだいやだいやだいやだいやだいやだいやだいやだいやだいやだ
いやだいやだいやだいやだいやだいやだいやだいやだいやだいやだ
いやだいやだいやだいやだいやだいやだいやだいやだいやだいやだ
だいやだいやだいやだいやだいやだいやだいやだいやだいやだ
だいやだいやだいやだいやだいやだいやだいやだいやだいやだ
だいやだいやだいやだいやだいやだいやだいやだいやだいやだ
いやだいやだいやだいやだいやだいやだいやだいやだいやだいやだ
キモチワルイキモチワルイキモチワルイキモチワルイキモチワルイ
ルイキモチワルイキモチワルイキモチワルイキモチワルイキモチワ
ルイキモチワルイキモチワルイキモチワルイキモチワルイキモチ
チワルイキモチワルイキモチワルイキモチワルイキモチワルイキモ
チワルイキモチワルイ
キモチワルイキモチワルイキモチワルイキモチワルイキモチワルイ
コワイコワイコワイコ
ワイコワイコワイコワイコワイコワイコワイコワイコワイコワイコ
ワイコワイコワイコ
ワイコワイコワイコワイコワイコワイコワイコワイコワイコワイコ
ワイコワイコワイコワイ
コワイコワイコワイコワイコワイコワイコワイコワイコワイコワイ
コワイコワイコワイ

そんなこと、せつたいに、許可しない（ユルサナイ）。
（ガールズサンクチュアリ）

リ（

「…ああ？なんだあ？」

ふとわたしの頭にこぼが響いた。

「くそ、なんだこれ。さげらんねえ。…おい！なんか切るもん貸してくれ！」

「あ？なんでだよ。」

「いいからなんかあんだろ？はさみとかカッターとかよ！」

「つたくそ、それが人にも頼むたいどかよ…ほらよ果物ナイフだ。これでいいだろ？」

「ああサンキュ」

わたしの下着に男がナイフの刃をたてる。

ペキッ

「ああ？」

「は？」

ナイフが折れた。

「おいなんだこれ？」

「しらねえよ！なんか、なんかねえのか他にい！」

男たちが刃物をさがしてばたばたしている。

どうしてかはわからないのだけれど、わたしの下着はやたらに堅いらしい…です。

ならばわたしの内側はだいじょうぶでしょうか。

そしてこれ以上にこわいことはもうおこらないでしょうか。

なんだか眠くなってきました。

瞳がおもい。

意識がとおく

…ふと目覚めると、わたしは車の座席で横になっていました。体をおこすと、肩にかかっていた黒くてわたしには一回りばかりおきな服がおちそうになります。そのしたには下着以外になにもきていません。あれ？なにがあったのでしたっけ。

「お目覚めですか？お嬢様。」
「ひゃっ！」

びっくりしました。この泰然とした雰囲気のおじいさんは確か…

「お父様つきの執事さん？」
「さようでございます。お久し振りでございます。お嬢様。御無事で何よりでございます。」
「……………」

…おもいだしました。わたし、襲われかけたのでしたっけ。いまさらになつてまたからだか震えてきました。がたがたがた。
あのあとどうなったのでしょうか。
わたしは、わたしは…

「…あっ」
「だいじょうぶでございます。お嬢さまはなにもされてはおりません。」

執事さんがわたしのことを抱きしめてくれました。

あたまをなでてくれました。

わたしは執事さんのむねを借りて、ずっとずっと泣き続けました。

事の顛末は、後日、執事さんから聞くことができました。

なんでも、執事さんが身代金を渡すふりをして犯人たちを単身にて強襲、執事さんを老人とあなどっていた男たちは一瞬で御用になったのだとか。

そのとき部屋に横たわるわたしはほとんど裸だったのですが、…なんとというかその、“いたした”形跡はなく、まわりには折れたナイフやはたまた、弾の切れたライフルなどが転がっていたそうです。

それはいったいどういうことでしょうか？

「…お嬢様は“念”というものをご存じでしょうか」

「びくっ！」

え？え？どうしてそこでそんな話がでてくるのですか？

「“念”とは一部の人間が修行の末に使えるようになる一種の超能力でございます。さまざまな超常的に現象を引き起こすことができ、私がお見受けする限りお嬢様はあるとき“念”を使って身を守っていたように思えます。」

「へ、へえー。そうなのですか。執事さんもその、ね、ねん？って
いうの、使えるのですか。」

「はい。屋敷にはあと数名ほど念能力者が仕えております。そのうちの一人が、お嬢様つきの執事と交代であたらしく就くことになりました。

お嬢様の執事としての仕事にくわえ、今後おなじようなことがおこらないようにボディガードとして、そして“念”の指導者としてお嬢様にお仕えることになります。」

「はあ、そうなのですか。」

「いくら自らの危機により感情がたかぶったとはいえ、なんの知識もなしに“念”を使って見せたのです。

きつとすばらしい念能力者になれることでしょう。」

「……………」

いえません！10年まえからこつそり修行していたとかいえませんから！

うう、執事さんの期待をはらんだまなざしがまぶしいです。

というか、いたのですね。お屋敷に念能力者。

うっかり錬でも成功させようものならいろいろとややこしいことになるところでした。

よかったのやら悪かったのやら。

それにしても“念”で身を守った、ですか。

となるとあの時、頭に響いた言葉はもしかして念能力？

無意識につくってしまったのでしょうか。

むむむ…ちょっと集中してみれば…あつたあつたこれでしょうねたぶん。

ええっと能力の内容はっと

“わたしのぱんつは鉄壁ぱんつ（ガールズサンクチュアリ）”強化系
・この能力は使用者がどのような状態でも常時発動する。
・この能力が発動した場合、能力者のぱんつは能力者本人と能力者が心から許した相手以外おろすことはできない。
・ぱんつおよびその周辺部は危害が加えられそうになったとき、必要に応じて堅をおこない、ありとあらゆるものからいっさい影響を受けない。

え、なんですかこれ。

つまりあれですか、ぱんつをはいている限り腰回りだけは最強の防御をほこると、そういうことですか。

ちよつとまつて、え？

こんなんじや戦闘はおるか日常生活でも使えませんか？

守れるのはわたしの貞操だけってそんな…

いや確かにだいいじではあるのですが、貞操以前に心臓でもさされたらあつけなく死んじやいますよね…これ

そしてなにより能力名がひどすぎます…。
うう、うらみますよ、無意識のわたし…。

新執事さんとかにどうやって説明すればいいのですか…

わたしはやですよ？“念”の初授業でその…ぱんつぱんつって、連呼するの

「…どうしてこうなったorz」

久し振りに敬語いがいの言葉をしゃべった気がします。

厳しくしつけられたとはいえこればかりは仕方がないのです。

仕方がないのですってば！

だからそんな目を向けないでくださいメイド長！

ここはお庭で、わたしはつぶやいただけですよ！？
なんでお屋敷のなかからその目を向けるのですか！？
地獄耳とかそんなレベルじゃ…はあ。

「すいません、以後気をつけます。」

遠くの窓にみえるメイド長に頭を下げると、彼女は“よろしい”と
でもいうように微笑んで去って行きましたとさ。

…はあ

第1話 報われた苦勞の結果（後書き）

絶体絶命の危機に眠れる力がめざめて窮地を脱する。そんな話。
これだけ聞くとありきたりですね。（笑）

ちなみに私はただ女の子に変な能力を手に入れさせたかっただけの
紳士ですよ。
とまどう女の子ってかわいいよね。

第2話 新たなる道への目覚め

みなさんきいてください。新しい能力ができました！
新しい能力ができました！

やっぱり大事なことなので二回言いますよ。

どのようなものをつくらうか悩み続けてはや三日ほど。

この三日間ほとんど眠れていませんでした。

…ふふふ、あーでもないこうでもないで試行錯誤しましたが閃いて
しまえばあとは一瞬です。

もうわたしすごい！

天才ですわたくし！

寝不足でテンションがひどいことになっていますがそんなの知った
こっちゃありません！

いやっふーいえいはいえい

あの事件から苦節三年。

新執事さん、もとい執事くんのもとで毎日きびしい修行に耐えきつ
た成果がついに実った
のです！

本当に厳しかったです…もうね、あなた本当にわたしの使用人かと、
わたしのいえに忠誠とか誓っているのではないのかと、なんと問い
詰めたくなったことが…

いや、半分は自業自得というかなんとかわたくしにも責任がある
のですけれど…

本能で念に目覚めたと思われている手前、たいていのことは

同じく理論よりも本能で理解するだろうとか思われているのですよ

ね。

理論型と本能型で習得の仕方が全く違う。なんでも念とはそういうものなのか。

ちよいと見本をみせられて、体の内からグワツと引きだす感じで、とかいわれてもわかるわけないでしょう！

組み手していればかってに目覚めるだろうとか買いかぶりもはなはだしいです！

それでも修行の筋は通っているので、すでに風化しかけている前世の記憶で

理論的な部分を補完しつつがんばったところ、まあそれなりに成長しました。

いまでは一部を除いてとりあえず一通りのことはできるようになりました。

オーラを感じるのに10年もかかったのが信じられないですが、やっぱり教えてくれる人がいるかないかでは大分違うようですね。

と、いうわけで、新能力発表前にちょっとだけいまわたしのできることと、

修行の過程でわかったことをおさらいしてみますか。

それにこの能力の発動にはちょっとだけ下準備が必要ですし。

その下準備というのが…

「さあ、執事くん。わたしを…ってください。」

「へ？」

「あれ？聞こえませんでした？この…でわたしのことを…してくださいっていったのですよ！やり方はお任せしますから、ほらはやくはやく。ハリーハリー。」

「は、はあ…。」

こちらは執事くんにお任せして、わたしの意識は内へ内へ…
ものごとの節目節目に過去を思い起こして反省することは大切ですからね。

さて、おさらい開始ですよ。

念の修行で一番はじめに行ったのは“錬”の体得でした。

能力のできた時点で自然と“纏”はできるようになっていたので、一段飛ばしての開始です。

これはなんだかんだで結構簡単にできました。

なにせ執事さんの見本と「もやもやを、こっ、ぎゅっとして、ぱつと！」ってアドバイスはともかく、腰回りにほかのなによりもまさる最高のお手本があるのですから、からだ全体がぱんつと同じ条件になるように

と考えればこれがなかなかいい感じでした。

え？からだ全体がぱんつと同じっていやじゃないか？ですって？

いやまあ、たしかに最初は“I am the bone of my panty.”（体はぱんつでできている。）”みたいでいやでした。

ショーツ、パンティ、ドロワーズ、スパッツ、かぼちゃにくまさん
e t c e t c …

ありとあらゆるぱんつが存在する無限の荒野をつくりだすのですね。わかりたくありません。

とか考えて鬱になったりもしました。

ですけど、しだいにどうでもよくなったというか、自分のぱんつでもできていることがわたしにできないのが悔しいというか…

そう、気がつけばわたしのぱんつはわたしの貞操の守護者であると同時に、

わたしの念の修行における最大の好敵手ライバルになっていたので！

…いまふりかえるとだいぶアホの子ですね、わたし。

…え、おほんつ。

これはあれです。

きびしい修行であたまがちよっとだけゆるくなっていったってことでひとつ…だめですか？

だめですよね…

えと、いいのです。そのおかげですんなり修行が進んだのですから結果よければついていいますしだから終わったことだからはやく本気だったあのころの記憶は消えるわたしががんばれわたし。

と、つぎに“絶”のほうですが、最初に言いました、わたしには永遠に不可能だとわかりました。

なぜって、ここでも出張ってくるのがわたしの念能力もといわたしのぱんつ。

わたしの念能力はわたしが“どのような状態”であろうと“常時”発動するものなので、

いくら絶をしようとはんつだけはオーラをまとうのをやめてはくれません。

けっか出来上がるのが“異様に目立つぱんつ”です。

存在感が限りなく薄くなるのに、腰回りだけそのままなので、相対的にぱんつがめだつ、ということですよ。

ためしに絶状態で何人かの使用人に話しかけてみたところ、みなそろって

わたしの目や顔でなく腰回りを凝視しながら会話に応じてくれました。

…これなんて罰ゲーム？

あと“凝”とその他応用技の数々はいろいろと試した結果、これらは可もなく不可もないといったところですか。

“凝”はそれなりに叩き込まれましたが、その他は触り程度にしか行っていません。

執事くんいわく、まずは基本がしっかりしてからとのこと。

最後は“発”および水見式の結果とわたしの念能力に対する執事くんの見解考察です。

“発”じたいは“錬”とおなじですんなり成功しましたね。

まあすでに能力もちな手前、当然といえば当然ですけど。

そしてみなさんおまちなかの水見式ですけど、始める前はわたしもまだ期待していたのですよ。

突発的に作ってしまった能力は強化系でしたけど、わたしの系統は放出や変化のどちらかなのではないかってですね。

隣り合った系統ならば間違いが起こってしまっても仕方ありません、

というよりまだ、変幻自在のバンジーガムとかみたいな能力にあこがれていたのです。

強化系で殴り合いとか本気で勘弁してください、みたいな感じですか。

ですがそんな期待や祈りもむなしくコップからはお水があふれ出しました。

何度もやりました。

いつまでもやりました。

しかしお水の色は変わらず、味も変わらず…

わたしの目からもお水があふれてきましたよ…

あれ？おかしいな。こっちのお水はしょっぱいや。

…はあ

べ、べつに悔しくなんてありません。

あれです、無人島とかで一番やくにたつのは強化系ですもん。

わたしが一滴のお水でみんなを救うのですから。

変化も放出も操作も役に立たない中、わたしは無人島のヒーローですから。

濾過したお水に不純物うかべる具現化なんて不届き者はわたしの命令でリンチにしてやるのですよ。

…そんなわけでわたしの系統は強化系で本決まりです。

ちよつと執事くんやっぱりってなんですかやっぱりってわか

っていたのなら教えてくださいよ。

え？教えたけどわたしが信じなかつたんだ、ですか？

…ふつ、これが若さゆえの…いえ、なんでもありません。なんでもありませんったら！

なんてこともありませんが、おおむね何事もなくおわりましたね。

そのあと、執事くんが教えてくれたのですが、わたしのように本能で能力を作ってしまった人は、その作った能力自体や、作った時の状況に縛られて、一から新しい能力を作るのが難しくなってしまうそうです。

まったく違うものもできなくはないのですが、うまく使いこなすのに相当の労力をそいで修行しなければいけないとなるとか。

執事くんもこのタイプでむかし結構苦勞したのだと、話してくれま

した。

それをふまえた上で、話は冒頭に戻り、わたしの苦悩の日々が始まります。

まずまっさきに考えたのは、能力の効果をぱんつだけでなくブラやほかの衣服にも転用できるようにするものでした。

これなら実用的にも見栄え的にも申し分なかったのですが、あの事件のわたしが念に目覚めたあの瞬間、わたしはすでにブラも衣服もはぎとられた後だったのです。

そんなわけでこの案はボツ。

というよりも作ろうとしても作れませんでした。

制約なしに衣服まで絶対防御とかやろうとしたらふつうにチートすぎてメモリが足りません。

またいくつか考えてうまくいきそうだったのが、能力の効果をぱんつを“はく”以外の方法でも

発揮させるようにするものです。

ぱんつを“にぎって”相手にパンチで威力はふだんの何倍か。

ぱんつを膝に“かぶせれば”とび膝蹴りの攻撃力もアップ。

あげくぱんつを“かぶれば”どんなヘルメットにもまけない最高の

兜とかす…

…って、わたしはどこの変態さんですかっ！

見栄えとか世間体とか以前にふつうに御用になりかねませんっ！

なまじ今の能力との関連付けという点ではなんだかうまく作れてしまいそうなのが、またたちが悪かったりします。

むしろこれも徹夜で寝ぼけて朦朧とした意識で危うく作ってしまうところでした。

一度設定するとリセットはできませんからね。いやはやくわばらくわばら…

ほかにも、ぱんつからカウンターで念弾 攻撃するためにスカート
めくらなきゃ。不採用。

全身タイツ型ぱんつを具現化&着用 いやそれもうぱんつじゃない
よね。不採用。

心ゆるしてなきゃパンチラしてもぱんつみえない スカートでも戦
えます。採用。

おもしろしても地下深くに転送、ぱんつよごれない そーえばあの
時失禁しましたっけ。採用。

人間砲弾ただし弾頭はぱんつ わたしはえびになりたい…不採用。

…などなど様々な案がうかんでは消えうかんでは消え、なかなか決
めることができませんでした。

むしる時間がたつにつれて考えが突飛になってきて、最初のころに
は全否定した物でも

“なんかこれでもいっかな…”とか思っちゃってかなりきけんな状
態です。

…まあ、こまかくて変な能力はノリでちょこちょこ作っているの
ですが…

メモリちいちゃいから気にしない気にしない。

さておき、そこでふと、わたしの頭に言葉が響きました。

思い出しなさいと。

恐怖にふるえていたあの時を。

初めて念を使ったあの時を。

わたしの念の原点にしてすべてにかかわるあの瞬間を。

そう。あの時、わたしは、“手足を縛りあげられていた”…！

もうね、ひらめいた瞬間ね、ビビっときましたよビビっと！
興奮でハイになった頭が、これがわたしの新能力だって、ひっきりなしに叫んでいるのです。

そしてそのまま思いついたままに、ひらめいたままに、本能のままに作り上げたのがこの…

「拘束された箇所およびその周辺を硬で守ってくれるまさに絶対防御、“束縛された安全地帯”^{レディースシエルト}なんです！わかりましたか？執事くん！」

「…お嬢さま、なんだかテンション高いですね」

「ふふふ、悩みぬいた末に最高の一手を思いついたのですから当然です！ああもう！いまわたしはすごく気分がいいです。これがうわさに聞く徹夜明け、もとい三徹明けのテンションというやつですね！？いやっふーいえいえい」

「…お嬢さまがこわれた」

そんなことしていたら準備がおわったみたいですね。
いい感じに全身が拘束されています。

技術はないですがしっかりと動けないようにぐるぐる巻きにされていますね。

「…お嬢さま、言われたとおりに縛りあげましたが、どうですか？どこかきつかったりしませんか？」

「…むしろ締め付けられているほうが、守ってもらっているようにいいい…ほふう…」
「……………」

と、なんだかうつとりしている場合じゃありませんね。いまは能

力の性能テストの真つ最中なのでから。

「よし。それじゃあ執事くん、用意もできたことですし、わたしの
こと思い切りなぐってくれませんか？」

「……………」

「あ、忘れていました。さるぐつわも付けてください。頭部の条件
がそれなので。…あ、はひはとうほあいあふ（ありがとぅございま
す）。」

「……………」

うん？なんだか執事くん、両手握ってふるふる震えてますけどどう
したのでしょう？

「…お嬢さま。」

「はひ？」

「…これはもしかしてぼくのせいですか？ぼくの修行があまりにつ
らかったからお嬢さまは、お嬢さまは…っ」

「…？」

執事くんの様子がなんだか…って、うわなんか執事くんの右手にす
ごい量のオーラがが *ggggg*..

「ほ、まっ（ちょ、まっ）。」

「…いまのいままで気付かなかったぼくを許してください。あやま
る資格がないのはわかっていますが、それでも言わせてください。
本当にごめんなさい。…でもだいじょうぶです。いまからぼくがこ
の拳で…」

「…（パクパク）」

ちょ、ちょっと待ってまだあがるのですか!？

これ明らかにただの硬とかじゃなくてゴンくんのジャンケンゲームみたいな念能力ですよね！？
たしか執事くんの能力は悲しみに応じてオーラの量が増減する能力だったはず。
というかいくらなんでも強すぎです！
何がそんなに悲しいのですか執事くん！

「お嬢さまを、正気にもどしてさしあげます！おおおおおりゃあああ
ああ！！！」

「っ。」

ドガンッ！！

なぐられた瞬間から世界が勢いよく回転しています。
そのうえ執事くんがあつという間にとおくに離れていきました。
そしてそのままバウンドを一回、二回、三回してからぐるぐる……
目、目が回ります。

「……っは。だ、だいじょうぶですかお嬢さま……！」

我に返った執事くんがこちらに走り寄ってきますが、だいじょうぶではありません。

たしかに意外なことにあれだけのオーラで殴られたのにどこにも痛みは感じませんし、
すごい勢いで飛んだはずなのに特にGもかかりませんでした。
……思ったよりずっと性能高いですね、これ。

ですが、視覚的に目が回って、回って、ああ意識が、遠く

「…ううう。」

「あ、お嬢さま！よかった目が覚めたんですね！」

「…あ、えと、ここは？」

「ここはって、お嬢さまのお部屋じゃないですか。お嬢さま、あれから丸一日ねむっていたんですよ？…はい、紅茶です。やけどしないように」

「ああ、はい。ありがとうございます。」

…ふう。紅茶が美味しい。

なんて、一息ついたらさっぱりと目が覚めました。

……………いろいろな意味で

「…ああ、やってしまいました。」

「お、お嬢さま、大丈夫ですか？」

だからだいじょうぶじゃありませんよ、もう…

いまなら、執事くんがあの時、どうしてああなってしまったのか理解できます。

…“わたしをしばって”、“わたしをなくって”。

ああもうほんとに我ながらなんてことを言ってしまったのでしょうか。

ふつうに変態さんじゃないですか、あきらかにMな人ですって。

しかも、あたらしい能力もへんなテンションでつくっちゃってくれ

ちやつて…

縛られなきや発動できないっていつのにどつやつて自発的に使えと
いうのですか…

自分で自分を縛る？

どんな高等プレイですかそれ…

でも作つちやつた以上、習得しないといけませんよねえ。

自己捕縛術。

あと縄抜けの術も。

「…はあ。」

「お、お嬢さま？」

「すみません。しばらく一人にさせてくれませんか？」

「あ、はい。わかりました。」

執事くんがいそいそと退出していきます。

これでお部屋にはわたし一人きり。

…ふつうにへこみますね…。

まだ執事くんと話していたほうがよかったですかね。

それにしても、自己捕縛術ですか。

なんだか響きがシユールなことばです。

よし、ちよつとやってみましょう。

もうやけくそですよやけくそ。

「とりあえず、ぐるぐるーっと巻きつけて、腰にとおして、
ここにはあとで腕を入れるから。」

そうして、こうして。おお、だんだん動けなくなってきました。

進めば進むほど動けなくなりつつ、先を予想しながら巻いていく。

なかなかどうしてパズルみたいで楽しいです。

コンコン

ノックですか？

まあちよつと早いですけど十中八九執事くんでしょうね。

あの子、あれで心配症なところがありますし。

執事くん相手ならいまのままでもいいでしょう。

どうせちよつと前にさんざん醜態をさらしたのです。

もうなにをしたっていまさらですよ。

「どうぞ」

「失礼いたします。」

メイド長「だと…っ!？」

どうして、どうしてよりもよってこのタイミングっ!

ちよつと楽しいと思つて、すこしだけ笑みをうかべてしまつた、
いまっ!

ああそんなことよりも、ま、まずいです。あの目が、あの目がああ!

「お嬢様。」

「びくっ!」

「お召し物の替えをお持ちいたしました。こちらに置いておきます
ので。」

「へ?」

「それでは失礼いたしました。」

…あの目がなかった?

いや、むしろこれは、スルーされた。

「まって！まってくださいメイド長！とととつわっ」

ずべしっ

ベッドから落ちてしまいました。

そういえばわたし、縛られていて今はうまく動けないのでしたっけ…

「…うう、メイド長のおに、きちく〜。」

地べたをはいつつ呪詛をはきます。

スルーって、スルーって！

ふつ々に叱られたほうが何十倍も楽なのに！？

…すべては、すべてはこの能力のせいです。

この能力をつくった過去のわたしのせいです。

そう！いまのわたしは何一つ悪くはありません！

だから思い切り罵りましょう。過去の自分の…

「ばっかやろー！」

…ふう、ちよっとすつきり。

第2話 新たなる道への目覚め（後書き）

お嬢さま、Mにめざめる。そんな話。

構成が前回と全く一緒なのは次回からなおせればいいなと思った
り。
ではまた次回があれば

第3話 ある青年の魂の叫び

「いま、お嬢さまがなにより手に入れなければいけないのは“目”です。」

「はい?」

“束縛された安全”ガールズシエルターを習得してから半年ほどたったある日の修行前、執事くんがいきなりそんなことを言い出しました。

「“め”って、“目”ですか?顔についてる二つある?」

「はい。その“目”です。」

「...?」

意味がわかりません。

この子はいったいなにを言っているのでしょうか?

「そんな目で見ないでください。ちゃんと説明しますから。“目”というのはつまり相手を見極めるための“目”のことです。」

「...見極める、ですか。」

「失礼ですが、お嬢さまの強さというのはひどく中途半端です。幼少のころより続けている武術も、念をつかって戦う技術も、どちらもせいぜい人並み程度。能力も守るばかりで攻めるには向かず、そのうえ守るにしても能力の使用にはどうしてもタイムラグが शामिलします。」

「まあ、たしかにそうですね。」

「もし、お嬢さまがなんらかの危機に陥り、敵と相まみえたとき、お嬢さまは判断を下さなくてはなりません。その敵に自分は勝つことができるのか。勝てないならば逃げることはできるのか。はたまた逃げることにすら難しく、能力を使って助けを待つしかできないの

か。

それが一瞬でできなければ、さいあく能力発動前に殺されてしまいます。そしてその判断を下すために必要不可欠なのが、相手の力量を見極める“目”というわけです。」

「…おお、なるほどです。」

わたしもこの半年間なにもしていなかったわけではありません。

能力を使う上での課題だった、自らを拘束する技術もだいぶんあがりました。

というか、この件に関してはどうやらあふれんばかりの才能をひめていたみたいなのですよね。わたし。

お父様の書齋で、人を縛るすべについて書かれた本を見つけてからはあつという間でした。

そ、その、ちよつとえつちな感じの本だったので、最初は抵抗もありましたけど、やってみるとなんかすらすら上達するので実は楽しんでましたり…

本をみながら執事くんでも縛ってみれば、たいがい一度で成功して縛り方も頭に入りましたし、自分を縛るためのアレンジも結構すらすら思いつきました。

暇をみつけては練習したりいろいろな縛り方を試したりしていたので、いまでは3秒もあれば他人を、5秒もあれば自身だって縛り上げて見せまし、もちろん縄抜けも完璧です。

むしろこの手のちゃんとした縛り方だと、ふつうの人じゃほどけないので自分で抜けられないと悲惨なことになります。

能力のおかげで縄を切ることもできませんしね。

こんな感じで日々上達してきた捕縄術ですが、それでも戦闘中に5秒間も時間をかせいで片手間でできるほど簡単でもありません。いままで気付きませんでしたけど、執事くんの言とおりの“目”の強化はわたしにとっての必修科目のようですね。

「とはいえ、どうすれば“目”の修行ができるのでしょうか？」

「そのことについては、僕に考えがあります。“目”を鍛えるならば実際に色々な人をみてみるのが一番です。そして、こんなことにおあつらえ向きなのがまさに、あそこですよ。わかりませんか？お嬢さま。」

「…わかりません。どこですか？」

「ふふふ、わかりませんか。ならばおしえて差し上げます！何千、何万もの人々があつまる、天下に名高き武道家たちのメッカ！それこそ天空闘技場です！」

「……………」

…好きなのですね。天空闘技場。

その後しばらく、血沸き肉踊る男のロマンと格闘技についての演説がお屋敷に響き渡るのでした。まる。

「…40階でしょうか？」

「いえ、たしかに強く見えますが動きに無駄が目立ちます。20階程度です。」

「あ、勝負ついた。へえ、ほんとに20階です。」

むむむ、どこのだれかは知りませんが、ふがないですよ。にしても、執事くんの評価がはずれません。さすがです。

「じゃあお嬢さま。あっちの筋肉ムキムキの黒人選手はどうです？」
「うわすごい筋肉です。…でもなんか鈍そうなので10階くらいとか。」

「当たりです。ちょっと簡単でしたか。…なら今度は右端でやってくる、銀髪でネコみたいな顔したあの男の子は？」

右端の男の子…と、あれですかね？

「って、男の子ってほんとに男の子じゃないですか。5、6歳くらいですか？そもそも勝てないように思いますけど。」

「いえ、あれで彼、なかなか強いですよ。30階はかたい。」

「そんなうそです！…って勝ちましたね。一瞬で。おお40階ですか。すごい…。」

そんなわけで今わたしたちは天空闘技場の一階で絶賛観戦中もとい修行中です。

修行方法はいたって簡単。

執事くんが適当に指示した人物が、勝つか負けるか、また何階に振り分けられるか予想する、というものです。

いやこれなかなか難しいのです。

そろそろ一時間経ちますが的中率は2割5分といったところですか。

それにしてもいきなり天空闘技場なんて言われた時にはびっくりしましたが、出場するわけじゃなかったのですね。よかったよかった。

わたしは別にMとかじゃあないので痛いのは普通にきらいですし、
こわいです。

このことを執事くん伝えた時は、は？みたいな顔されましたけど、
まったく失礼しちゃいます。

執事くんはわたしをなんだと思っっているのでしょうか？

でも、執事くんって修行をつけてくれる分にはすごく優秀なので
よね。

この修行だつて、言っつてしまえば簡単ですけど、なかなか思いつく
ものでもない気がします。

とはいえ、さすがに飽きが入ってきました。

選手のみなさんも一階だけあって強さがばらばらなもので見ごたえ
のある試合なんてほとんどありません。

しかも制限時間が3分なので面白くなりそうな試合もすぐに打ち切
られてしまいます。

これには一階の観客席がまばらなのにも納得できるというものです。

「…ふあ」

とと、あくびが出てしまいました。気をつけないと。

「おや、さすがに疲れてしまいましたか？ならすこし早いですけど
移動しましょうか。」

「はい？こんどはどこにいくのです？」

「200階です。せっかく来たんですから、念能力者どうしのしあ
いも見ていかないと。」

あれ？200階の試合も観戦できるのですか？

「えと、試合当日でチケットとかだいじょぶなのですか？」

「大丈夫もなにも僕の出場する試合ですから、いくらでも優遇できますって。お嬢さまは一番迫力のあるS席でみられますよ。」

「え？ぼくってぼくって、執事くんですか？ボクさんとかじゃなくて？」

「ちょ、ちょっと待ってください！執事くんって200階クラスの闘士だったのですか？いつのまに？」

「あれ、いつてませんでしたっけ。僕が執事になってお嬢さまにく前は天空闘技場のファイトマネーで生計立てていまして。この旦那さまに仕えるきっかけもここでの試合がたまたま目についてスカウトされたんです。200階の登録が消えちゃうのももったいないので、許可を得て休みの日なんかたまに出場しにきてたんですよ？」

「…そ、そうだったのですか。」

ま、まったく知りませんでした。

そもそも執事くんがわたしつきになったのって3、4年まえですよ。ね。

ってことは相当な古株じゃないですか。実は執事くんってすごい人なのでしょうか。

まあ、それも試合とか観客の様子を見ればわかりますか。

わたしの予想だとたぶん中堅あたりの実力者くらいじゃないですかね。きつと。

おおおおおお！

「……………」

…って、放心している場合じゃありません！

いま執事くんの試合直前なのですが、もりあがりか半端ないです！
ふつうに人気闘士じゃないですか！

だれですか中堅所とかいつていたの！

いや、わたしですね。すいません予想外すぎてテンパってますわたし。

それでは、両コーナーより選手の入場です！

おおおおおお！

執事くんが出てきました。

服装もいつもの執事服じゃなくってゆったりした長ズボンにタンク
トップですか。

細身にみえて実は筋肉質なのでタンクトップがにあっています。
なかなかカッコいいですね。

それに対して相手の方は…なんていうか、長いです。

背の丈はゆうに2mごえですね。

下手したら250cmいつているのではないのでしょうか。

日本人の平均くらいの身長と比べると、さらに大きさが
きわだちます。

それに腕も妙に長いですね。力を抜けば膝まで届きそうです。

体格的にはずいぶん差がありますけど、だいじょうぶでしょうか。

よし、ここは一つ

「執事くん！がんばってくださいーい！」

あ、執事くんちよつとびつくりしましたね。

そのまま苦笑しながら手をあげてこたえてくれました。様になって
います。

へへ、頑張つて大声出したかがありました。

相手選手がすごい勢いで執事くんのことにはらんでいますけど、気に
しない気にしない。

両選手、準備はよろしいでしょうか。ルールは制限時間無制限、
相手選手をノックダウンまたは10ポイント先取した方が勝利とな
ります。

お、始まりますね。

それでは、両者がまえて………ファイツ！

いきなり相手選手が突っ込んできました。

そしてその両腕がオーラで包まれたと思つたら……

…気持ち悪っ！腕がぐにゃんぐにゃんと鞭みたいになつてまがつ
て……

四方八方から攻めています。執事くんはなんとかしのいでいます
ね。

…私なら無理です。体術的にも、なにより生理的にあれは受け付け
ません。

それにしても、あれも念能力でしょうか。強化が変化あたりですか
ね。

「なんじゃあ、ありゃー！」

「む、あれはまさか…」

「なっ！お前さん、しってるのか！？」

「ああ、聞いたことがある…」

お、これは運がいいですね。

どうやら近くにテ、ーマンがいるみたいです。

…雷、のほうが今は通じるのでしょうか？

わたし雷、って誰のことか知らないので何とも言えないのですが。

っと、今へんな電波がきましたけど、聞き逃すわけにはいけません。

「なんでも、あれがああ男の能力らしい。もともと長いリーチで相手を翻弄する戦い方をするのだが、念でその腕撃の威力とトリッキ―さをさらに高めたのだろう。200階にあがってきたのは比較的最近だが、ここでの戦いにも慣れてきた実力者だ。」

「ってこたあ、こりやこのままあのひよるなげえ野郎の勝ちってわけか。へへ、5万Jも賭けたんだ。そうじゃなきゃ困るぜ。」

「いや、それはちがうな。」

ん？執事くんが負けるみたいなお話に一瞬むっとききましたけど。どういふことでしょうか？

「あれは、あせっている。」

「ああ？」

「やつは知っているのだろう。自分の闘っている相手がどんな人物なのかを。その実力はフロアマスターにも匹敵するといわれている古参の闘士。その能力から“叫びの呪言師”とも呼ばれる対戦相手のことを！」

…二つ名キターー！！

え？え！？執事くんってそんなに有名人さんなのですか？

それにしても厨二くさいですね。
どこから出てきたのですかその名前…。
執事くん的能力って悲しみの感情がオーラの量に影響するものだけ
のはずでしたが。

「“叫びの呪言師”は特定の言葉を叫ぶことでその力を何倍にも高
めることができるんだ。だからやつは能力を使われる前に勝負を決
めようとしている。」

「な、そんな野郎だったのかよ。…おいっ！距離が開いたぞ！」
「く、くるぞ、呪言師の“叫び”が！」

いままで一方的に攻められていた執事くんがいきなり攻撃をいなし
て、相手の体勢を崩します。

その際におおきくバツクステップをしたと思ったら、その場で足を
肩幅に開いた構えをとりました。
つ、ついにわたしの知らない執事くん的能力が見られるんですね。
そして執事くんは大きく息を吸って

《 クリリンのことかー！ー！！！！ 》

ゴウつと目にみえない圧力のようなものが会場中に広がりました。
…え？えー！ー！？

なにがえー！？っていうかえー！ー！？
な、なんで？なんでその言葉が今でてくるのです！？

「なっ、クリリンノコトカ」だと！？最大出力の呪言じゃない

か！」

「そ、そんなにすげえのか？」

「ああ、彼の呪言では“ハカッタナシヤア”と同レベルのものだ。ふだん格下相手に使う“スコシアタマヒヤソウカ”や“ソノゲンソウラブツコワス”とは比べ物にならない。」

「…おいおいマジかよ。」

…………マジかよはわたしのセリフだとおもつのですが…

それからの試合は一方的、というより一瞬でした。

あまりの迫力に腰の引けた相手に、執事くんが一撃。それでノックダウン。試合終了です。

そして今、わたしは勝者インタビューのおわった執事くんの控室に向かっています。

まさかという疑念と、そんなわけないという理性がまじりあって頭が破裂しそうです。

“もしかして執事くんはわたしと同じ境遇なのでしょうか？”
さりげなく、あくまでさりげなく確かめなければ。

「 執事くん！」

「あ、お嬢さま。どうでしたか？ぼくの試合は」

「え、あ、その…か、カツコよかったです。」

「は、ありがとうございます。」

ま、まずいです。何も考えないで突貫してしまいました。
ど、どう聞きましょう？おちつけ、おちつくのですわたし。

「そ、そうです！執事くんいつの間にも新しい能力なんて作っていた
のですか？いきなり叫ぶからびっくりしました。」

「ああ、あれですか。」

よ、よし！この質問なら自然と“叫び”の内容につながられる。
と、内心わたしが喜んでいると、

「いいですか？お嬢さま。ぼくはなにも新しい能力なんて作って
いません。使ったのはお嬢さまの知っている僕の能力、“悲拳被頭”
ですよ。」

「え？でもそれならどうして…」

「あの言葉は、幼少のころぼくを育ててくれたうえに、念の指導を
してくれた師匠が話してくれた物語の中のセリフなんです。…あれ
を口に出すと死んでしまった師匠を思い出して、すこし悲しい気持
ちになるんですよ。」

「あ、そうだったのですか…。」

師匠さん、ですか…。

そっかそれならその師匠さんが私と同じ、“転生者”だったのだし
ようか？

死んでしまっているならもう確かめることもできません…。
一度あつてみたかったですね…。

なんて思っていると、唐突に執事くんがニヤリとわらいました。
え？なんで？

「でも、それだけじゃありません。あれはカモフラージュです。」
「かもふらーじゅ?」

「ぼくは本来、能力を使う上であんな予備動作を必要としません。でも相手にそう思わせておけば、いざという時、いきなり能力をつかって相手の虚をつけるでしょう。」

「…言われてみれば、そのとおりです。」

「いいですか?この闘士たちにはわかっていないものも多いのですが、念での戦いは基本的に“騙し合い”です。自らの底をぜったいに見せてはいけません。能力の詳細を知られているだけで勝てる見込みがぐんと下がりますからね。確実に勝てるタイミングを計って奥の手を使う。相手が隠す奥の手に警戒する。それが大切なんです。わかりましたか?」

「へえ、勉強になります。」

執事くん、そんなことまで考えて、わたしを天空闘技場に連れてきてくれたんですね。

ほんとうに念の指導者としては優秀です。

「はは、まあこれ全部、師匠の受け売りなんですけどね。」

「いい師匠さんじゃないですか。ちなみにその師匠さん、ほかにはどんなお話を?」

「実になる話はこれくらいですよ。ほかはだいたい奇想天外な物語ばかりです。強化系と放出系に特化した人たちが願いをかなえてくれるボールを探す話ですとか、すべての念を消し去る右手を持つ特質系の青年の話、ある少年が父親を捜すためにハンターを目指す話もありました。」

なんかこの世界風にアレンジしてありますけど、ドラゴンボールに禁書録にハンター×ハンターでしょうか。

どれもこれもなつかしいですね。もう20年近く前の話ですし、ほとんど覚えていません。

今度くわしく話してもらうのもいいかも…

…ってハンター×ハンターですか!?

「し、執事くん！そのハンターをめざす少年の話、もっと詳しくお願いします！」

「え？あ、はい。主人公はたしか、ゴンくんだったかな？ハンター試験でゾルディック家の子と仲良くなったり、ヨークシンでマフィアのいざこざに巻き込まれたりします。ほかに比べて現実みたいたったのでよく覚えてるんです。」

「そ、そうなのですか…」

知っています！

執事くん原作のこと知っています！

でもまさか、これからおこる本当のことだとは思いませんよねえ。

まあ、原作にかかわるつもりは毛頭ないので関係ないといえばそれまでですけど、さすがに驚きますって。

だんだん師匠さんのイメージがよくわからなくなってきました。

「…な、なんか今日は疲れてしまいました。もう帰りませんか？」

「そうですね。もういい時間ですし。お疲れ様ですお嬢さま。」

「はい、お疲れ様です。」

はあ、今日は新事実がおおくてさすがに疲れてしまいました。帰ったらベッドに直行ですね。

ゆっくり休んでまた明日考えましょう。

「あ。そうだーっ思い出しました。」

「ん？なにをですか？」

「師匠の言葉です。」

うう、まだ何かあるのですか。

「なんでも自身を転生者だとかトリッパーだとか名乗ったり、原作がどう、ハンター×ハンターがどうかいってるやつにはかかわるな。絶対に厄介事にまきこまれる。とのこと。一生に一度会うか会わないかくらいらしいですけど、お嬢さまも気を付けてくださいね？」

「…はい。…ありがとうございます。」

…いえない。

…わたしがまさにその人だなんて口が裂けても言えない、です。

第3話 ある青年の魂の叫び（後書き）

いろいろ判明する、執事くんの設定。そんな話。

ちなみに他の転生者を作中に出す予定はありません。

そんなことしたら私の力量じゃ話をまとめられなくなりますので。

第4話 彼にしか扱えない武器

最近お屋敷の警備がなんだかものものしいのはなんでなのでしょう
か。

昼間の間はそれほどでもないのですが、夜になると、ちょっと探せば
いつでも警備員の姿が目に入っているようになっていきます。

そのうえ、使用人のみなさんの様子が、なんというかピリピリして
いるというか。

常に何かに警戒しているようなのですよね。

私には心配させないようにとでも言われているのか、体裁だけは今
までどおりなのですが、正直言っればはれです。

「と、いうわけで、どうしてでしょうか？執事くん？」

「は、は、なんのことですかね。」

またしらを切るつもりですか。

「お屋敷の警備員さん、最近妙に忙しそうですが。」

「…さて、ぼくにはわかりかねますが。」

「…むう。」

このことを聞くのももう何回目でしょうか。

いつまでたってもだれに聞いても知らぬ存ぜぬで通されてしまいま
す。

正直あきらめる以外にどうしろと。

そしてこの話をごまかすためか、執事くんの修行がいつもよりずっ
とずっとつらい内容になっています。

今までは厳しくも、わたしに無理な負担がかからないような絶妙な

あんばいで行われていたのだとここ最近痛感しています。

執事というか使用人の一人として、またこんな形とはいえ弟子をとっている人間としては大問題なことにも感じますが、それだけ事態がせつぱつまっているのかもしれない。

わたしとしてはいつもどおりに戻るのをいまかいまかと待っているしかできないみたいです。

いやになります。

それと、修行がづらいと感じるようになったからか、このところある疑問がつかんできました。

すなわち、“わたしはどうして念の修行をさせられているのでしょうか”。

まがりなりにもわたしはお嬢さまであり、べつだん強くなる必要などかけらありません。

鍛えるとしても護身術程度がせいぜいで、幼いころから続けている武術で及第点。

念に関しては、纏もできれば一般人に比べてずっと頑丈になるので十分すぎるほどのはずです。

だというのに執事くんは、実践を意識してわたしを天空闘技場にまでつれていったりと明らかに度が過ぎています。

いや、実は本人が行きたかっただけということも否定しきれませんが…。

さておき、念で新しいことができるようになるのがうれしくて全く考えたことがなかったのですが、一度考え始めるとその疑問が頭から離れません。

そして浮かぶ疑問はなにも念や修行にかかわることだけではありません。

本来、今のわたしが修行以外にすべきこと、していたであろうことを考えても大きな疑問が浮かんできます。

先ほども言いましたが、まがりなりにもわたしはお嬢さまなのです。お金持ちのお嬢さまが、自らの家に絶対に求められるはずの“政略結婚のこま”という役割について、わたしはついぞ聞いていません。気がつけば、わたしも18歳も半ばになりました。

本来ならば、婚約者でも紹介されてもいい時期でしょう。

好きでもない相手と結婚するということも、いささか抵抗はありますが、この年まで養ってもらった家のためだとおもえば納得もしますし、ちゃんと受け入れようとも思っています。

思い起こせばちよつと昔、といつても2年くらい前までは、お見合いとまではいかずとも

他の良家の御子息と顔を合わせるような催しもそこその頻度で行われていました。

興味がなかったので意識していませんでしたが、それもいつの間にかぱったりとやみ、いまでは修行に明け暮れる日々です。

いくらなんでも、さまざま環境とわたしのしていることがかみ合っていないません。

と、いつてもこれらのことすべてがわたしの考えすぎているだけという可能性も高いのですけどね。

修行に関しては、楽しんでやっているわたしに執事くんが合わせていてくれているだけ。

結婚については18、19ならまだ遅すぎるといっわけでありませ

ん。

いまはお相手を選考中。

そう考えれば、一応どちらもつじつまは合います。もしその通りなら、深刻ぶって執事くんやメイド長なんかに聞いても恥をかくだけなので、これらのことは特に誰にも話していません。やはりつらくなつた修行のせいでイライラが募っているのでしょうか。どうにも最近、突拍子のないことを考えがちです。

ひとまず疑問は置いて、お屋敷の雰囲気がおちついていても気にな

るようでしたら…

「誰かに相談でもしてみますか。」

「ほらお嬢さま、しゃべっている暇があったら円習得のために集中しましょうね。50cmも広がらないんじゃない、ただのちよつとおつきな錬ですよ。」

「…はい。」

…はあ、どうにかしてストレス発散しないと気がめいってしまえますよ。

苦手な円の修行もとうにおわり今は夜、草木の眠る丑三つ時。

月明かりと、ランプの明かりを頼りにお父様の書斎を物色中です。ストレスを発散する効率的な方法は人それぞれかと思えます。暴れる。食べる。遊ぶ。寝る。わたしの場合は…

「…縛る、といったところですか。」

正確には趣味にはしる、ですかね。

前回お借りした人を縛るすべについて書かれた本はほぼすべてマスターしましたし、自分縛りのタイムアタックにも飽きてきたので、新しい資料を探しています。

事後承諾でお父様に本を借りるむねを伝えた時、お父様はわたしの手のなかにある本を見て、あからさまに安堵のため息をはきました。

きつとわたしには見られたくない、その手の本がまだあったのでしよう。

あの時の本は一通り見てすぐに見つかるような表に置いてあったので、今回は人目を盗んで隠し棚とかがないかを探します。

気分はまるで宝探しです。いえ、わたしにとつては宝でもあながち間違っていないませんか。

「ふんふん。こちらへんとかちよつと怪しいですよね。」

部屋の隅に裸婦の胸像が置いてあったのでいじってみます。

こういうのつてよくドラマやゲームでは目がボタンになっていたり首が回ったりしますよね。

試してみますが…

「…なにも起こりません。まあそう簡単にはいかないですよね。」

ほかにボタンになりそうなところはつと

「…乳首。…まあ違うとはおもいますが念のため。そーれポチつとな。」

カチャン。そんな音がまっくらな部屋に響きます。

「……………うそやん。」

…おもわず、へんな関西弁臭い言葉が出てしまいました。うそやん。それはないですよお父様…

でもなんて言うか、えー、正直ドン引きです。

心の中でなんとかフォローしようかと思いましたが無理でした。

これを作らされた人もかわいそうに…

でもギミック的に今のわたしにとっては当たりな気がします。
いまので開いたらしい胸像の台座部分を物色します。
えっちな本は、どこですかっつね。

「……なんか普通に機密っぽい報告書ができました。暗殺がどうとか書いてあります。」

え？こついつのつてもっと嚴重に暗号つきの金庫とか、幾重にもつらなる仕掛けをといではじめて開く隠し部屋とかにあるものではないのでしょうか。

それが乳首ボタンひとつつて……もしかして真面目な侵入者なら見向きもしませんか？乳首。

それにしても、うちも暗殺依頼とかしていたのですね……あまり気分はよくないですが。

とはいえ所詮は他人事なので、ふーんくらいの感慨しかありません。どこか遠くでは今も戦争でたくさんの方が死んでいるんだよとも言われた程度の気分です。

こんなものを見ていてもしょうがない、と元あった通りにしまっておこうとしたとき、ふとある文字に目がつきました。

「……幻影、旅団？」

その文字を見た瞬間、ずいぶん遠い記憶がうつすらとよみがえってきます。

幻影旅団。

ハンター×ハンターに登場するキャラクターたち。

ヨークシンのドリームオークションを襲撃してその出品を強奪する

も、クラピカくんをはじめとした人々に組織として手痛い出血を強いられる。…だったはず。

すでに細かい内容はうる覚えです。

大まかな結果しか思い出せません。

それでも、どれだけ危険な方々かは簡単に予想できます。

「…うわぁ。お父様も何を考えているのでしょうか…。」

懐かしい単語につられて、すらすらと報告書を読み進めていきます。どうやら暗殺者を雇い始めたのがすでに3年も昔の話のようです。

きっかけは…なにか盗まれたみたいですね。

何が盗られたのか書いてないのはあまりよろしくない代物だったからでしょうか。

暗殺がうまくいかないのに痺れを切らしたのか、大きく動きすぎて2年程まえには幻影旅団をつけ狙ってとしているのが周囲にばれたりもしています。

それからはおそらく意地とプライドですかね。

なんだか尻尾をつかんで襲撃しているようですが、ことごとく失敗しているようです。

…この暗殺者さんたち、もしかして無能ですか？

というか、わたしに縁談が来ない理由もこれだったりしません？

2年前といえば、お見合いもどきがなくなり始めた時期とも重なります。

そりゃ、凶悪なことで有名な組織にちよっかい出してる所の娘と、縁を持ちたいとはおもいませんよねえ。

今のところ放っておかれているのは単に面倒だからといったところでしょうか。

あの人たちからすればこちらの無能さんたちなんてそこのハエと

大差なさそうですし。

「…おろ、これが最新の報告書ですか。えっと“偵察任務失敗。逃走時、ターゲットから本邸への襲撃を示唆される。”」

……あれ？本邸ってここじゃありませんか？

もしかしてもしかしなくても、わたしたち幻影旅団に狙われていません？

…うそやん！？これこそほんとにうそやん！？

ドンッ！

うわなんか今すごい音がしましたね。

場所はお屋敷の外、正門のあたりでしょうか。

…まさか、ね。

「…野性児っぽい大男。」

窓から外をのぞいてみると、門が粉々に崩されていて、脳みそまで筋肉でできているんじゃないかと思うような巨漢がいました。

たしか旅団にいましたね。あんな人。

クラピカさんに殺されちゃう人でしたっけ。

名前はもう忘れました。

「…うう、生涯原作のげの字にも関わらない予定だったのに…。だれですか、勝手にわたしの死亡フラグ立てたの。」

時間ももつたいたないのでさっさと窓の近くから離れて、ぐちぐちい

いながらも自分のことをしばらくしぱり。
執事くんと合流したいですが、お屋敷のなかで旅団の人と遭遇した
くもありません。

わざわざ自分の部屋を抜け出している時に襲撃を食らいますか。
今頃わたしのことを探しているのですよね、執事くん。

いまのうちに丁寧丁寧に“束縛された安全地帯”^{レディースシエルト}の準備をしてい
きます。

おおきな音がお屋敷の中からも聞こえてくるようになりました。

わかっていましたけどいくらなんでも早くありません？

そら急げわたしががんばれわたし。

「……ほれでよひ（これでよし）」

さて、準備はできました。

あとはだれかが来るのを待つばかり。

使用人の誰かが運び出してくれればいいのですが、誰かが暴れる音
がもうかなり部屋の近くまで来ているので望み薄ですかね…。

「そらよつと！」

バギンと音をたてて部屋の扉がひしゃげられました。

その先にいるのは、返り血なのかとところどころ赤く染まった大男…

返り血？

「お、なんかありそうな部屋だな。」

血？血って…だれの血？

大男はまだこちらに気づいていません。

けれど、いまはそれどころじゃありません。

よく考えてください。

この人たちどうしてここにきたのでしょうか？

何をしにここにきたのでしょうか？

ここにきたのはうつとおしい暗殺者の依頼人にいかげん腹をすえかねて、です。

だからここで彼らがするのは…

「ひなほろひ（皆殺し）。」

「あ？」

思わずつぶやいてしまったせいで、気づかれてしまいました。

けれどわたしはそれとは別のことでひどい後悔にさいなまれます。

わたしはいいです。能力があります。

わたしの発にはそれこそオーラを切るとか、そういうことに特化した能力相手でなければ無敵です。

しかし、この屋敷でも念を使えるのはほんの一握り、旅団に抵抗できる人などほとんどいません。

「…なんだあこりゃ？オーラ？」

ここに来るまでに、こいつは何人の使用人を殺したのでしょうか？

いったい誰が殺されたのでしょうか？

この使用人は両親にかまってもらえなかったわたしにとってみな家族。

物心ついたところから世話してもらっている老婆もいます。
最近なかよくなつた若い子もいます。
それをこいつは、みんなみんな…

「なんかしばられてっけど、まあいいか。」

大男はわたしの頭に手をかけます。
そしてそのまま、握りつぶそうとしてきました。

「…ああ？」

この大男の手も赤く汚れています。
ここまでの使用人たちもこうやって殺してきたのでしょうか。
非力な使用人たちはこいつから逃げる以外に生きるすべはなかった
はずです。

しかし、彼らはわたしをおいて逃げることはできません。
わたしを探している最中にこいつとはち合わせてしまった子がどれ
だけいたでしょうか。

「…かてえ。念か？」

わたしはこんなところでうだうだしている場合ではなかったのです。
能力のおかげでわたしが殺されることはありません。
しかし能力のせいでもうにも親しい人たちが犠牲になったようです。
なんとという皮肉でしょうか。

「…たく、なんで俺がこんなめんどくせえこと…」

大男は何をおもったかわたしの足をつかみ…

「…やんなきゃなんねえんだよ！」

思い切り壁にむかって叩きつけました。

壁には大穴があいたけれど、その程度でどうにかなるほどわたしはやわではありません。

「へえ、これでも無傷かよ。すげえなおい。」

やわではありませんが動けない以上どうしようもないのです。

わたしは悔しさにはがみしながら、あきらめて放っておかれるようになるまで待つしかないでしょうか。

「お嬢さま!!！」

「…ん！」

いまの音を聞きつけたのでしょうか。執事くんが来てくれました。

能力もすでに発動済みなのか、かなりのオーラをまとっています。

これなら…

「貴様！何をしている！」

「お、強そうなやつが来たじゃねえか。こちららこんな退屈な仕事押し付けられてイライラしてたんだ。おら全力でかかってこいよ。」

「…さもなきやこの女、殺しちまうぜ？」

「っ！お嬢さまから手をはなせえー！」

執事くんがオーラをさらにおおきくして右手に集中し、渾身の一撃を見舞おうといっきに距離を詰めてきます。

「そんなにこいつが大事なら、くれてやる！」

すでに執事くんは拳をあてることのできる距離までちかづいていきます。しかしそれにたいして大男はおもむろに、持っていたままだったわたしのことを振りかぶり、迫りくる執事くんの拳にむかって振りぬきました。

ドガン

「がつ！」

「ひふじぶん！（執事くん！）」

わたしの体と執事くんの拳がぶつかるのを感じた直後、ぶれる視界のなかで執事くんが向かいの壁に叩きつけられて、ずるずると崩れ落ちていきます。

「ほんな…（そんな…）」

そのまま、執事くんはぴくりとも動きません。

「おいおい、一発かよ。だらしねえ。まあつっても、あいつが弱かったって言うよりも、こいつがすげえってこつたるうな。」

そう言って大男はわたしのことを肩にかつぎます。

「そついや、団長が念のこめられたなんちゃらナイフってのを愛用してたっけか。さながらこいつあ、念を発する棍棒”ってところか？はっ、ただのめんどくせえ野暮用かとおもいきや、とんだ土産ができたもんだぜ。」

「へ？」

呆然としているわたしに向かってそんなことをのたまいました。土産って、もしかしてまた誘拐されるのですか？

しかも今度はそもそも人として扱われていない感じがします。とうぜん素直に連れて行かれるわけにはいきません。

「ほ、ほっと、はなひ…（ちょ、ちょっと、はなし…）」

「うるせえよ。だまつてる。」

「ひっ」

抵抗しようとすると思い切り殺気を向けられました。

恐怖で体がこわばります。

危害を加えられることがないとわかっていても、ただただ怖くて何もできません。

そのまま、大男はお屋敷の外に向かって歩き出しました。

幸か不幸か、途中で人と出くわさず、あらたに被害が出ることはありませんでしたが、

止められることもなくわたしはお屋敷から離れていきます。

わたしはただ震えて、遠ざかるお屋敷を見ていることしかできませんでした。

小さくなっていくお屋敷は、とても静かでした。

第5話 後いくつ寝ると

赤くて、朱くて、紅くて、緋い。
あたりは見渡す限りに鮮やかで、アカという一つの原色で染まっている。

赤いのは空。

地上の異変を周辺に示すように、その夜空の黒にアカを映している。

朱いのは炎。

集落で一番大きな建物が、放たれていた火で燃えあがり黒い煙を上げ、その中身を吐き出している。

紅いのは血。

吐き出されてきたのはぜい弱な女や子供などの非戦闘者。
それらはためらいもなくふるわれる暴力にその命を失っていく。
そのうちの一つ、わたしでちぎり飛ばされて上半身のなくなつた子供の体から噴き出る血液は、普段の切り傷などで見慣れた赤黒い静脈血ではなく、見とれるほどきれいで純粋なアカいもの。

緋いのは目。

一人の男が、なにごとかを叫びながら手に持った刀剣をこちらに向けてふるう。

太刀筋も振るう早さもなかなか洗練されていて、それが剣舞であったなら素直に感心し楽しむことができたかもしれない。

しかし、相当の修練をつんで至つたと思われる剣は、念という超常の能力のまえでは何の役にも立たない。

わたしが一度無造作に振るわれただけで男の剣は腕ごとひしゃげた。もういちどわたしが振り上げられたときに、男がわたしたちを睨み

ながらつぶやいたのは

女の名前らしき単語と謝罪の言葉だった。

男は死んだが、憎悪にそまり光を失った男の目はそれでもなお、寶石のようにアカく美しかった。

わたしでひとが殺されるのはなにも今回が初めてではない。

わたしはすでになんとか彼の仕事場に連行されて彼の獲物として活躍している。

とはいえ今回の相手は宝石展の警備員でも豪商のボディガードでもなく、緋い目をもつ少数民族。

求められるのはスマートな盗みを演出するための効率のよさではなく、その目を緋く染めるための残虐性。

その場はまるで絵にかいたような地獄だった。

本物の地獄よりもよつぼど地獄らしい地獄だった。

そんな地獄を贅沢にも特等席で観ることのできたおかげで、わたしの心は屋敷を連れ出されて以来ようやく再起動の憂き目をみた。

よほどの衝撃でなければもう二度と動くことのないはずだったのに、あまりなできごとに再起動せざるを得なくなってしまった。

見て見ぬふりをできる限度を超えてしまったのだ。

再起動した心の底に狂気よりもさきに敷かれたのは、あきらめ。

もういいや、という。

人殺しの集団の一部だろうがなんだろうがもうそれでいいや、というあきらめ。

たった今わたしは自らの心を守るために、入ってしまった郷に従うことを選択した。

ふさぎこむのはもうやめにしよう、標的の建物の間取り図をみんなと一緒にかこんで喧々囂々とお宝までの道順を議論するのも、彼と一緒に邪魔する奴らをなぎ倒すのもきつと楽しいに違いないと、そ

う考えることにした。

ふと遠い遠い森の中にある少年がだれにも気づかれずに逃げていくのを見る。

その米粒より小さな背中に希望を見ながら、わたしはこれからの愉快な日々を思っ

むりやりに心を躍らせることにしたのだ。

「…ば、ばけものだー！」

「く、くるな！くるんじゃねえよー！」

「くそっ、おいお前ら！うだうだ言ってる暇があんならもっと撃てやあー！」

目標のお屋敷の入ってすぐにある大きなホールに悲鳴が響きます。今日の獲物はある絵画で、わたし達のお役目は警備をひきつける囮役です。

わたし達が思う存分暴れている間に、ほかの人たちがささっといっただいてしまう。そんな感じ。

それにしてもいやはや、事態はさながらパニック映画ですかね。

いや、相手が銃弾をもつものでもない怪物なら、むしろそれはB級ホラーかもしれない。

見慣れていると逆にギャグのように感じることかかそっくりです。

そう思いませんか？ウボオーさん。

「おらおらどうしたあ！？」

…アイコンタクト失敗です。

やれやれですね、みたいな目線をむけていたのですが、ウボオーさんなんだかハイになって全然こっち見ていませんでした。

「ツハ！なんもできねえザコはすっこんでろや！おらあ！」

「うがつ。」

「ん〜」

煽るのに飽きたらしいウボオーさんが警備員の集団に一気にちかづいて先頭にいた一人をわたしで打ちすえました。

打たれた男は何メートルも吹き飛んで壁にひびをつくっています。うんうん。ナイスショットです。思わず感嘆の声が漏れてしまいます。

「…う うあ あ…」

「ひい、たたすけて…」

「うあー！あ、あああー！！」

そしてそこから始まるウボオーさん無双。

もはや警備員の皆さんに抵抗できるはずもなく、逃げ出すものもいれば恐怖でうごけなくなるもの、半乱狂で銃を乱射するものなど壊滅状態です。

手近なところからどんどんなぎ倒されていきます。

このままならあと数分もしないうちにお仕事終了ですかね。いやー今回も楽なもの…って、後ろから何か来る！！

「んっ!」

「おっつ!」

ブオン!と、わたしの上げた警告の声に応えたウボオーさんが、わたしの目線を追って背後を薙ぎ払います。

それを紙一重でかわしてわたし達から距離をとるスーツ姿の男が一人。

その手にはオーラで包まれたコンバットナイフをさげています。念能力者、ですね。

「ッチ。気づくなよ。」

「おお!ちったあ骨のありそうなやつがいるじゃねえか!」

「うるせえな死ね。」

スーツの男は腰を折り身を低くしてこちらに走り寄ってきます。

その身のこなしは素早く、男がかすんで見えるほど。

しかしウボオーさんはわたしを振り回して男をナイフの刃が届く距離まで近づけさせません。

その一撃一撃は、ウボオーさんの膂力と私自身のまとうオーラもあり、牽制にもかかわらず軽く大木をなぎ倒せるほどの威力を有します。

けれど男はナイフでわたしをいなしつつ、つかずはなれずの距離を保っています。

本来ならば、いなしたところで無傷で済むようなやわな攻撃などではないのですが、男のナイフの刀身からは時折うすいオーラの膜が生じ、衝撃は膜でへだたれた男自身には届きません。

これが男の念能力なのでしょう。

防御用の変化系の能力といったところでしょうか。

「このやるうつ！いい加減にあたれ、や！！」

いつまでもいなされ続けたウボオーさんは焦れたようにそう大声を上げると、大きくわたしを掲げ、男に向けて振りおろしました。

それは今までとは違う全力の一撃。

一見隙だらけに見えても、その隙を突かれるまえに生じた風圧で相手は吹き飛ばすという凶悪な代物。

だというのに、それすらも男はオーラの膜でもっていなしてしまい、全力を奮った直後で数瞬の膠着を強いられているウボオーさんのふところに潜り込んできました。

そしてそのナイフをウボオーさんの心臓に突き立てる寸前、男は顔に会心の笑みを浮かべました。

これがわたし達の罠とも知らずに、です。

「んいいい！」

ゴスッ

「ぐっ！」

突然の真後ろからの衝撃が、男の顔を驚愕の色に染めました。

衝撃の原因は、わたしの頭突き。

もちろんわたしは全身を荒縄で拘束されていますが、それでも腰は曲げることができます。

というか自由に曲げられるように工夫して縛ったのは私自身ですからね。

この程度ならば制約に反することはありません。

意表をつかれた男はその直後、硬直の解けたウボオーさんの蹴りをまともにつけ、壁に激突し、大きな音をたててその壁を瓦礫の山に変えました。

ふふ、ざま見ろってんです。

「うわあ、またずいぶんと暴れたみたいだねえ。」

「まったく、ザコ共をこっちに逃がすんじゃないよ。おかげで手間がふえたじゃないか。」

「がはは、何言ってるやがる。大した手間じゃないだろうが。」

ちよつどよく獲物を抱えたマチさんとシャルナークさんがやってきました。

無事、目標も確保できたようですね。

「まあいいさ。ほら、さっさと帰るよ。」

「おうよー！」

「んー。」

さてと、今日のお仕事もこれで終わりです。お疲れ様です。ウボオーさん。

「ん？ああ。」

ぼんぼんとウボオーさんはわたしを軽く叩いてくれました。アイコンタクト、成功です。

「マチさん、マチさん、窓の外みてください。お月さまが綺麗ですよ。」

「そうかい。」

「マチさん、マチさん、聞いてください。今日は警備に念能力者がいたのですよ。」

「そうかい。」

「マチさん、マチさん。盗ってきた絵、なんかオーラがこもっていません？」

「そうかい。」

「マチさん、マチさん。しりとりしましょうっ？ “しりとり”。はい、マチさん “り” ですよ “り”。」

「リュウゼツラン。」

「…うー。」

「…。」

うう、なんだかマチさんが冷たいです…。

今は車でホテルまで移動中なのですが、ウボオーさんは助手席で寝ちゃってるし、運転してるシャルさんとはあんまり仲良くないので、となりのマチさんだけが頼りなのです。

「…ううーっ。」

「…わかった。わかったよ。降参だ。だからそんな声出すんじゃないよ。」

「やたっ。」

ふふ、マチさんはなんだかんだ言っても、結局は折れて相手をしてくれるので好きです。

「…ただねえ、あんたそれ、仕事もおわったし、縄をといたらどうだい？」

「なつ、マチさんがわたしのアイデンティティを否定するなんて！」

「でも、さつきは普通に歩いていたじゃないか。」

「歩くときはちゃんと歩きますよ。下半身だけ。」

「…食事のときは？」

「上半身だけ。」

「…そうかい。」

基本的に縄を解くのは必要な時だけです。

歩行、食事のほかには、物を書くときとか修行のときとか。

解くだけなら今では一瞬でできますし。

縛るほうは相変わらず数秒かかりますけど。

まあそれでも全身の縄を解くことはしません。

片手間で作った能力で、縛られている間は糞便や垢などで汚れないようにもしているので、トイレにも行かないでいいしお風呂にも入る必要がありませんからね。

それはわたしが旅団にかかわるようになってからずっとです。

「そうだ！マチさんも一回縛られてみればいいのです！きっとマチさんにもこのよさがわかりますよ！」

「…たのむからやめくれ。」

「いやいや、遠慮なんてしなくていいですよ？」

「…これのどこが遠慮してるようにみえるんだい？」

冷や汗をかいている様子のマチさんに、にじりにじりと近づいていきます。

といつてもスキンシップみたいなものですけど。

嫌われたくもありませんし、さすがに本気じゃやりませんよ。

まあ、なんだかんだでマチさんが満更でもなさそうな反応してくたらそれはそれで…

「それじゃあまず基本の」

「ねえ、もう少し静かにできないの？」

「…はい。」

いいところでシャルさんの制止が入りました。

あのままおふざけのノリで強引にいけば案外いけたかもしれないのに、もつたないです。

…それにしても相変わらず、シャルさんの言葉には棘があります。もちろん理由はわかっていて、わたしのことが嫌いとか気に入らない、というわけではなく、旅団員としての当然の警戒だと思われるます。

わたしは正規の団員とはちがって、旅団にかかわるきっかけに団長の意思が関係していません。

だって最初はウボォーさんがどこから拾ってきた、ただの“道具”でしたから。

お屋敷を離れたばかりの“道具”状態のわたしなら問題なかったのですが、あるお仕事が終わってから急に元気になっちゃったのですよ、わたし。

そのお仕事とはクルタ虐殺。

緋の目を盗りにいったときでしたね。

おかげでなし崩しで正式な団員ではないとはいえ、新たな“人員”が旅団の一部に組み込まれることになってしまい、急に態度が変わったこともあり何か企んでいるのではと、旅団の一部の人たちには警戒されるようになってしまいました。

シャルさんとか、パクノダさん、フェイタンさんあたりですね。

とはいえそれも昔の話。

時間という万能薬はたいていのことは解決してくれます。

旅団に組み込まれてからこれまでの数年間、ふつうに準旅団員というかわボオーさんの武器をやっていたので、

ここまであからさまなのは今ではシャルさんくらいなのですけど…。フェイタンさんですら、わたしにたいしての評価を“無関心”というところまで引き上げてくれているのにはです。

「ねえシャルさん。シャルさんってやつぱりまだわたしのこと信用してないです?」

「ノーコメントで。」

「…そですか。」

ノーコメントって即答するのは否定と同義でしょうに…。

まあ、それでも仕事は普通にまかせてくれるので、わたしがいままです旅団に貢献してきたのは認めていてくれるのではないのでしょうか。

くれていれば、いいなあ…。

それならばわたしは胸を張って言えるのです。

わたしは盗賊団、殺人集団、蜘蛛、幻影旅団の一部であると。

なんて物憂げにまた窓の外を眺めていたら、夜空を一筋、きれいに輝く流れ星が横切りました。

「うわぁ、マチさん、マチさん、いま流れ星がありましたよ? っしょに願ひ事しません?」

「わたしはいいよ。」

「むう、淡白な…あ、また！」

もうマチさんなんて放っておいて願ひ事です願ひ事。

願ひ事なら常日頃からこういつとぎのために考えていたのですから、あとは唱えるだけなのです。

それはわたしの、あの日から続く、唯一無二の願ひ事…。

「どうかあの子が、早くわたしを」

殺しに来てくれますように

いつか見たあの小さな背中に希望をいだいて、わたしはそう願うの
でした。

「ねえ？クラピカくん。」

能力設定集

主人公と執事くんの能力の詳細です。

あくまで補足ですので、読まなくても大丈夫ですけど。

主人公の強化系能力？

“わたしのぱんつは鉄壁ぱんつ（ガールズサンクチュアリ）”

- ・この能力は使用者がどのような状態でも常時発動する。
 - ・この能力が発動した場合、能力者のぱんつは能力者本人と能力者が心から許した相手以外おろすことはできない。
 - ・ぱんつおよびその周辺部は危害が加えられそうになったとき、必要に応じて硬をおこない、ありとあらえるものからいっさい影響を受けない。
- 以上1話より
- ・ぱんつは能力者本人と能力者が心から許した相手以外、パンチラしても見えることはない。
- 2話にてさりげなく追加

補足

ぱんつというあまりに限定的な発動条件が制約となるので、かなり強力な硬を纏感覚で維持できる。

ぱんつとは能力者本人がぱんつと認識した物を指す。

主人公の強化系能力？

“束縛された安全地帯”
レディースシエルター

- ・能力者が拘束された場合、拘束された箇所およびその周辺を硬でおおう。
 - ・体の半分以上が拘束された状態でさるぐつわをはめると、頭部にも能力が発動する。
- 以上2話より

補足

本人が拘束され動けなくなることが制約となるので、非常に強力な硬、および堅を纏感覚で維持できる。

主人公の放出系能力

“わたしのぱんつは純白ぱんつ（ガールズシークレット）”

- ・ガールズサンクチュアリ発動中、排泄物を地中に転送する。
 - ・レディースシエルター発動中、垢や汗などを地中に転送する。
- 以上2話にてさりげなく作成

補足

発動対象の限定的すぎるものが制約になるうえに、念に目覚めた時、失禁していたことが関連付けされている。そのためほとんどメモリを食わない。

主人公の強化系能力(?)

ヒックバンインパクト
“戯破壊拳”

・弱体板“超破壊拳”

・念によるやや高威力物理攻撃

以上第6話より

“束縛された安全地帯”^{レディースシエルター}を手元にかけて、気合い入れて殴るだけ。念は心技体の心部分が結果に大きく影響する。よって打撃に名前を付けただけで何となく強そうに感じ、実際それなりに威力が上がる。正確には能力ではなく技。

執事くんの強化系能力

ヒケンヒケン
“悲拳被頭”

・悲しみの感情におうじてオーラ量が増減する。

・悲しいと感じていると増えるし、嬉しいと感じていると減る。
上がり幅がおおきいが、反面、下がる時も一気に下がる。
以上3話より

補足

叫びは一種の自己暗示。

師匠の殺されたとき本能的に作成したという設定があるが、たぶん
本編では触れられることはない。

やっぱり念能力はシンプルでなんぼだと思っただ。

ほんとは主人公も執事くん位にしたかったけど、いつの間にやら
てじってど。

…どづしてこうなったorz

第6話 前向きにネガティブでいこう

月日が流れるのは早いものですな。

お屋敷で修業がてら半ニート生活をしていた時と比べて、お仕事を
するようになってからは本当にあつという間に時間が流れていきま
した。

そんなわたしの今回のお仕事はオークションの受付嬢です。オーク
ションの受付嬢です。

大事なことなので二回言いました。

なにが大事なのかって？

そりゃあ、このヨークシン・シティの地下競売はわたしアンダーグラウンドオークションが一日千秋
のおもいで待ち続けた原作イベントですもの。

もうテンションなんかウナギ登りです！

ちなみに今はオークションの開催される前の会場準備の段階です。
奥の方からはかすかにドタバタと慌ただしい音が聞こえてきます。

「ってなわけで、しばらくしばらくしばらく…」

上機嫌に自作の歌を口ずさみながら、手錠がかかってうまく動かせ
ない手を使って、腰から下を拘束していきます。

受付のテーブルでお客さんからは見えなくなるような箇所を縛るの
がミソです。

これはいつぞやから決めた、いつなんたる時でも体の一部は拘束し
ておくという自分ルールを守るために、ですな。

しかも、手錠をつけることで難易度を上げる縛りプレイ。

ちなみに今は、テレビゲームとかで言うところのみずからに制限
を課して遊ぶ縛りプレイと、単純な意味での縛るプレイをかけた高
等ギャグなのです。

ふふ、わたししゃっぱりセンスあるなーなんて考えていたら、エント

ランスの端にあるスタッフオンリーと書かれた扉からフランクリンさんとノブナガが出てきました。

「あつ、フランクリンさん。そっちの準備はどうですか？」

「ああ、こっちはだいたいわった。今はシズクがゴミを片付けてるところだ。」

「そっかよかったです。もうそろそろ時間だからちょっと心配だったのですよ。おつかれさまです、フランクリンさん。あとノブナガ、襟についてますよ。」

「あア？なにがだ？」

「返り血、です。」

うわ、やっちまったなアとノブナガがうだうだいっています。

フランクリンさん&ノブナガペアとウボオーさん&シャルさんペアおよびシズクちゃんは会場にいたスタッフや警備員のお片づけが今回の分担です。

それにしてもノブナガはフランクリンさんと違って直接切りかかるのだから、お片付けが終わってから着替えればいいのに……
どうしてスーツに着替えてからはじめたのでしょうかね。

「まったく、ノブナガはやっぱりダメダメですねえ。そしてそんなダメダメさんよりわたしのほうがウボオーさんの相棒の座にふさわしいと思うのですが、どうです？ノブナガ？」

「……またそれかよ。あアあアそうだなア。オメエがウボーのアイボウダゼー。」

「あ！またそうやってけむに巻くつもりですね！たまには真面目に答えてみるってんです。」

うがーっと、がなってみても、ノブナガはおうおうわかったわかったと相手にしてくれません。

まあこのやり取りも、もはやお約束なのですけどね。

最初は旅団の一員として認めてもらうために始めたこの問答ですが、そのうち楽しくなってきた。今では本心からノブナガはわたしのライバルです。

ノブナガの方がどう思っているかはこの際関係ありません。

「おいノブナガ、そんなことしてないで着替えてこい。そろそろ時間だ。」

「ああ、わかったよ。」

フランクリンさんに言われて、ノブナガはまた裏に戻って行きまし

た。気がつけば、もう奥からのドタバタも聞こえなくなりましたし、別行動だったウボォーさんたちもあらかた終わったのでしよう。

そうとなれば、お縛りのつづきを急がねばいけませんね。

細めの荒縄を、こっちにまわし、あっちとおし、ここをくぐらせて、って手錠にひっかかったー！

「さて、そろそろ客が集まってくるころだろう。オレもフェイタンと合流してくる。あとは打ち合わせ通りだ。オークションが始まったら、一人もここからだすな。」

「りょーかいですー！」

元気よく答えたわたしのあたまを、フランクリンさんのおおきな手のひらがぼんと叩いてくれました。

その手は大きすぎて、なでるといふよりやさしく包まれるようで結構こちいいものでした。

さあこれから、本格的にお仕事です。

今回の仕事はなんだか子供のころに眺めていたアリジゴクの巣を思い出します。

これから地下ノ巢の中に向かうヒトノアリたちは全て死んでしま
います。

そしてわたしはそれを上から眺め、なんとかはい出ようとするアリ
をつついて巢に戻す。

そんなお仕事。

…わたしは自分が罪を犯していることを自覚しています。

ですがそれに歡心こそすれ、怠諱はありません。

なぜなら、わたしが犯した罪が大きければ大きいほど、わたしに下
される罰はきつととても大きなものになるのでしょうか。

…さてと、そんなわけで今日もお仕事、がんばっていきましよう！

「ああ、あとひとつ伝えておきたいんだが…。」

「なんです？」

せつかくやる気を出したのに、歩きだしていたフランクリンさんが
ふっと振り返って水を差します。

むう。どうしたのでしょうか。

「…能力の準備のときに、あまり、にやにやしないほうがいい。さ
すがに少し気色悪い。」

「…え」。

いまは9月のあたま、残暑厳しいとはいえ、白が暮れてしまえばだ
いぶすごしやすい季節になりました。

そんな秋の夜長をわたしたち旅団は悠々自適に気球でわたっていき
ます。

一仕事終えた後のこの時間はやっぱり格別…

…といければよかったのですが、現実には困惑といらだちの混じったなんともいえない沈黙に、気球のなかの空気が最悪です。

オークション会場にて、お客さま方にフランクリンさん特製の念弾をご購入していただき、金庫からその代金を受け取る予定でしたが、まさかの文無し、すなわち金庫の中にはオークションに出品されるはずの品が何一つありませんでした。

別行動で金庫にむかっていたマチさんフェイタンさんにつれられて金庫の中を覗いた時は、もう一同茫然としてしました。

その段になってようやく、ああどつかの念能力者がなんかやったのでしたっけ、と役に立たないうる覚え原作知識が浮かび上がったものです。

そんなわけで、ただいま団長の指示待ちなわけですが

「オレ達の中に配信者がいるぜ。」

電話で団長と話していたウボオーさんのこの言葉が響いた瞬間、それまでギスギスしていた空気が凍りつきました。

はっ、とだれかの息をのむ音が響きます。

…ごめんなさい。見栄張りしました。息をのんだのわたしです…。だれかとかいってすいませんでした。

いやですね？今、いつもの定位置であるウボオーさんの隣にいます。ですが、ウボオーさんから怒気っていうかなんていうかとかく攻撃的なオーラが垂れ流しになってすごく怖いのですもの。

いまにも暴れだしそうな猛獣の籠の中にいればだれだっておびえるでしょう？

というより平気な顔しているほかの団員の人たちの方がおかしいのです。

ビクツとしたわたしおかしくない。

だからシャルさん、そんな目でこっちみないで！

「 おう、じゃあな。 お前ら団長の声きこえてたか？」

うわ、馬鹿なことしていたら聞き逃しちゃいました。いつの間にかウボオーさん普段通りになっているし、団長に説得されたのですかね。

それはさておき、こういうときこそ、いでよわたしのうる覚え知識！このあと原作ではたしか…

「えっと、陰獣相手にケンカですよな？」

「そのまえに、いくらか雑魚ちらしだな。そのへんはオレ適当にやっからお前ら手エ出すなよ。」

「好きにするといいいね。」

「見てるだけだとヒマそうだから、はやく終わらせてね？」

ふう、知ったかぶり成功です。ちょっと間違っていたけど許容範囲でよかったです。

フエイタンさんとシズクちゃんがうまく流してくれました。

「それにしても、陰獣ですかー。ねえマチさん、陰なんかかっていうとなんかエッチな言葉っぽくありません？」

「…陰茎とか女陰とかのことが言いたいのかい？」

「……………っ！。」

「…自分からふっっておいて顔赤くするんじゃないよ。」

「…え、えへへ。」

くっそう。マチさんが赤面しながら、何言ってるんだい！とかつて反応を期待していたのに何たる失態ですか！

…考えてみれば幼いころからスラムみたいなところにいる子がこの程度で赤面するほどのうぶなわけがないのですよねえ。

自分で埋めた地雷を自分でふんづけたような気分です。
ああ恥ずかしい…。

「…はあ。」

マチさんのあきれ顔から目をそむけ、地上をみおろすと、黒塗りの車やいかにもな顔した黒服さん達がわたたと右往左往しているのが分かります。

ふと思いついて、クラピカくんいるかなーと探してみましたが、あの印象的な金髪も民族衣装も見つけられませんでした。
さんねん。

ドンっという銃声にしては重い音を合図に、ウボォーさんによる対黒服さん殲滅戦が開始されました。

わたしは残りの団員の人たちと一緒に高台から観戦中です。
と、そのとき、わたしの着ていた薄手のポンチョのすそがくいくいつてひかれました。

「ん？シズクちゃん、どうしたのです？」

「いや、一緒にたたかわないのかなって。」

「あ……」

言われてみれば、いつもウボォーさんとセットのわたしがここに残っているのはおかしい…ののでしょうか？

何となく、ウボォーさんのオレー1人でやるって発言に従っていただけなのですが…

…考え始めたらなんだかウズウズしてきました。
ああ！もういいや！乱入しちゃいましょう！

「わ、わたしもちよつと行ってきます！」

「ん、そっか。いつてらっしやい。」

そういうとわたしは、高台から会場へとつづく崖を走りおりま
す。半分くらい駆け下りたときに、奥のほうからバズーカを
かっついてくるハゲさんが目に入りました。
こつこつときほど私の出番です！

「こつこつ！」

崖のなかほどから、地面をけって大ジャンプ！

目標はあのハゲさんがバズーカを放つだろう位置のちよつと手前で、
ウボオーさんの楯になるように。

風ではいていたミニスカートがひるがえりますが、どうせばんつは
見えないのだから気にしません。

異様な乱入者に、一部の黒服さんたちが一瞬こつちに目を向けます
が、ウボオーさんのほうが脅威と感じたのかすぐに視線をはずしま
す。

そんなものは放っておいて、空中でいちど上半身パージ！アーン
ド！全身拘束！仕上げにさるぐつわをかんて完全防備です！

そしてそのまま狙い通りの位置に着地した瞬間、すでに放たれてい
ていたバズーカの弾がわたしに直撃しました。

その衝撃にわたしは吹き飛ばされますが

「おう、きたのか。」

「ん！」

ぱしつと、その先にいたウボオーさんが受け止めてくれました。

「 やったか!？」

けむりの向こうからお約束の言葉が聞こえます。

いやあ、こんな仕事をしているとちよくちよく聞くことができるのですが、何度聞いてもにやにやしてしまいますね。

ウボオーさんのほうを見てみると、とてもいい笑顔をしていました。やっぱりね。

そんなウボオーさんがおもむろにわたしの足をつかんで、ぶんつと一振り。

すると爆煙がはれて、驚愕の表情をつかべた黒服さん達が茫然と立っているのが見えるようになりました。

「う、うわあああああああ!」

「に、にげるあ!」

一瞬の静寂のあと、我に返った黒服さん達は蜘蛛の子を散らすように逃げ出しました。

「はっ、い人も逃がさねエよ!」

「んっー!」

もちろんそのまま逃がすほど、わたしたちは甘くはありません。

あつという間に追いつくと、ウボオーさんはわたしを振り回します。この攻撃で相手を狙うことなどありません。ただひたすらに集団につつこんで適当に振り回すだけ。

そもそも、獲物にあてる必要などないのです。

ウボオーさんの怪力とわたしの念にかかれば、振りぬいたあとの衝撃だけで体がバラバラになりますし、真芯でなんか当てた日には体

重100 kgはこえていそうな大男が数十メートルは飛んでいきます。
念能力者相手じゃなければいつものことですが、相変わらず圧倒的です。

ギイイイン！

ん？

ひと段落ついて、さあ次に行こうかと一息ついた時にその妙な音は聞こえました。

すると、いままで蹂躞を続けていたウボオーさんが立ち止ります。

「うち、遠くからこそごと」

ああ狙撃でもされたのでしょうか、うってウボオーさんちょっともしかしてなんでわたしを振りかぶるのいや待ってそんな

「むかつくんだよっ！」

「ん！んん！んん！んん！」

なげたー！

唐突に空を飛ぶ羽目になった私ですが、その速さが半端じゃありません！

ぐんぐんと数キロさきの岩山がせまってきて、その上の狙撃主に向かっていきます。

しょうがない覚悟を決めますか、岩山にいるのは4人、いくらわたしが単品じゃいまいち強くないといってもどうにかかります。たぶん。

そのまま一直線に飛んだわたしは見事にそのうちの1人のお腹にあたまから激突しました。

骨と内臓のつぶれる音があたまに響きます。まずは1人。

「なっ、お、おんなあ!？」

残りの人が驚いている間に、下半身の拘束をパージ、自由になった両足を大股にひらいてぐるんと振り回しその勢いで立ち上がります。次は反射的に拳銃をかまえようとしている男を目標に、倒れそうなほどの前かがみで走り寄り、最初の激突で離れてしまった距離を詰めます。

「う、とまれ！」

「ぶっ。」

制止の声とともに男は銃を撃ちますが、拘束されたままの上半身とあたまにはじかれて銃弾は明後日の方へ。

その様子を鼻で笑ってやりながら、最後の一步を大きく左足で踏み込み、これを軸足に男の側頭部めがけてハイキックを入れてあげました。

蹴飛ばされた男は白目をむき、口から唾液を垂らしながら、わたしのねらった通りに仲間の元へと飛んでいき、そのうちの1人にぶつかりました。

ぶつけられた方の男は体勢を崩し、わたしはそれに追いつくと右足をおおきく上に振り上げて

「っぐぶっ！」

こんしんのかかと落とし！これで3人。のこりは1人です！ですが、そう意気込んで、のこった1人の方へ顔を向けようとしたその時、そこに立っていたのは、ただのマフィアのチンピラではありませんでした。

…念、能力者？銃を捨てて構えをとっています。
あれは心源流の構えだったはず、です。
能力者にしてはなんだか練がたよりのないのですが…。

「変態でもみるような眼えすんなよ。どおせ銃弾程度じゃどうにも
なんねえんだろ？」

「…まあ。」

さるぐつわをはずして、話に応じます。
いまいち相手がつかみきれません。

「なあ嬢ちゃん、お前あれだ。心源流のお偉い師範代様に雰囲気
そっくりだわ。」

「…それが、どうかしましたか？」

男は勝手に語りだします。

「俺はなあ、強かったんだわ。すごく。ものすごく。けどそいつに
や勝てなかった。それが悔しくつてなあ。はらいせに稽古で同門の
やつ殺しちゃったんだわ。」

「…はあ。」

「そしたらな、死ぬ瞬間だけけそいつの雰囲気も師範代にそっくり
になってやがんの。目の前で人が死んだのはあん時が初めてだった
っけなあ」

「…。」

「それから俺あ、破門されてひとを殺す仕事に就いた。なんにんも
なんにんも人殺して、最近何となく、つかめるようになってきたん
だわ。」

何となく理解しました。

心源流の修行で下地があるときに念に触れて、それから独学で修業したってことですかね。

師匠なしで、修行方法がぶっ飛んでいますけど。

おかげでまとっているオーラがむちゃくちゃです。

「…それで？」

「いやなあ？」

会話しながら、上半身の拘束もはずし、両腕を体の前にまわしてポケットから取り出した手錠をかけます。

「生きてる時からそんな雰囲気のを殺せば、なんかつかめる気、しねえか!？」

「知ったこつちゃありませんね!」

そういった男は、体を低くして、こちらにタックルを仕掛けてきます。

いろいろな相手と戦ってきたえられた私の目は、この男が厄介な相手だと判断していました。

この人に何かきっかけを与えると、きつと本能で能力を作りだすに違いない。

それはそれはやっかないやらしい能力を。そう、かつてのわたしのように!

だからすぐに終わらせます!

「せいっ!」

タックルを横に飛んで避けると男に向けて後ろ回し蹴りを放ちます。しかし、この大ぶりの蹴りを男はさして目を向けることもなくバツクステップでよけてしまいました。

ですがこれでいいのです。
少しでも距離ができればあとはやることが一つだけ。

「ウボオーさんお借りしますね！」ビッグバンインパクト “戯破壊拳”
「んなっ！が、あぁー！ー！ー！」

手錠のかかった両手を、気合いをこめて思い切り地面にたたきつけます。

するとわたし達の乗っていた岩山の一角が崩れおち、男もこれに巻き込まれて、眼下に落ちて行きました。

きつと死んではいないでしょうけど、とりあえずこれではらくは大丈夫でしょう。

気絶とかしていなくても、登ってくるのが大変でしょうし。

「それにしてもうーん。ビッグバンインパクト “戯破壊拳” やっぱりいまいちたらないなあ。」

ウボオーさんの技の一つに“ビッグバンインパクト 超破壊拳”というものがあるのですが、実はこれ、ただ念をこめて殴るだけのシンプルなものなんでよ。それを技として確立することで威力の向上を図っているのですが、わたしも手に念をこめるくらいのことではできません。

というよりも拘束さえすれば、自らのオーラ量に関わらず結構な量な念をこめることができるので、それに名前を付けて“ビッグバンインパクト 超破壊拳”のまねごと、すなわち今回の“ビッグバンインパクト 戯破壊拳”にしてみました。いまいち威力が上がりませんでした。

だいたい本家の半分かそれよりちよつと多いくらいでしょうか。うーん、借り物であるという意識が強かったせいかもしれませんね。

「とと、そつだ！ウボオーさん！」

“超破壊拳”で思い出しました！

まったくあの人は人のことをあんなぞんざいにぶん投げてくれやがりまして！

いったいどうしてくれましょう！

ウボオーさんはウボオーさんであのあと陰獣と戦っているはず…

「…あれ？いない？」

岩山の端に立ち、わたしがもといた箇所に目を向けてみませんが、視線のさきにウボオーさんの戦っている姿はありません。その周辺には黒服さん達の死体がわんさか転がっているので場所を間違えてもいないはずです。

「…あれ？あれ？旅団のみんなも？」

そして、その場にはウボオーさんとはともかく他の仲間たちも誰一人見当たりません。

凝まですて必死に探しても見つからないこの状況に、いやな予感ともくもくと這い上がってきます。

…これは、まさか……

「…おいて、かれちゃいました…？」

ヒューと生温かい風が吹き抜けていく中、わたしは“わたし泣かない、だって強い子だもん”とどこかで聞いたようなフレーズをリピートして心の汗をごまかすことしかできませんでした。

第6話 前向きにネガティブでいこう(後書き)

上半身が動かせなくても、彼女はさるぐつつわをはずせません。
なんとたつて“プロ”ですから！

…なんのプロかはきいてはいけません。

第7話 虹の根元 前編

とある廃ビル、長年放置されて立てつけの悪くなった扉を、軽い体当たりで開いてまずは一言……。

「……ただいま戻りましたー。」

その奥に広がっているのは廃材の高く積まれた大きなお部屋、すなわちわたしたち幻影旅団の臨時アジトです。

ぱっと見る限り、ここにいたのはパクノダさんとコルトピさんと団長の三人だけでした。

「もー、他のみなさんはどこに行ったのですか？ちよつと文句言っ
てやらないといけないのです。」

「あら？あなたウボォーと一緒にさらわれたんじゃないの？」

「え？さらわれた？」

代表してパクノダさんが応えてくれましたが、何やら聞き捨てならない言葉が出てきました。

「ええ、陰獣と戦ったあと鎖を使う能力者に連れ去られたそうよ？
あなたに関しては何も言っていなかったからてつきり一緒だとおも
ってたわ。」

「……わたしはさらわれてなんかいません。」

「そうなの？それとシャルたちなら、そのさらわれたウボォーを助
けにいってるわね。」

「……。」

それにしてもうわー、シャルさん達、わたしの存在は完全無視です

かー…。

もしかして素で忘れていたりしませんよね？確かにウボオーさんを誘拐された緊急事態ですが、一言くらい気にしてくれたいと思っただけですよ。

それはそうとして、鎖の念といえばクラピカくんでしょうか？

「ところであなた、ウボオーと一緒にじゃなかったなら今までどこに行ってたのよ。」

「えっと、ウボオーさんがさらわれる直前に偶然みなさんとはぐれたのですが…え、あーそのあとはその…ご、です。」

「？。ごめんなさい、最後のあたり聞こえなかったわ。」

「だから…迷子、です。」

それをきいたパクノダさんは、ぽかんと言った体で固まってしまいました。

「…迷子って、シャル達がいちど戻ってきたのですから4時間近く前よ？その間ずっと？」

「…だって、だって仕方ないじゃないですか！車の運転はできないので町はずれの荒野からは歩いて帰って！お金も持っていないのでタクシーも拾えず！移動の足はみなさんに頼っていたのでアジトのちゃんとした場所も覚えていない！それにこんな廃ビルが意外と都心部に近いこんな場所にあるなんて誰が考え付くものですか！もつと離れたところかと思って歩き回って！…歩き回って！…はあ、はあ。」

「ちょ、ちよっと、落ち着きなさい。」

い、息が続きます。もつと言ってやりたいことがたくさん、ホントにたくさんありますが、パクノダさんに言っても仕方がないことはわかっています。

それにしても本当に大変でした。時間を知るすべはなかったのだ
だひたすらにさまよった記憶しかありませんが4時間って…尋常じ
やありませんね…。

いざ明確な時間を知らされると疲れがどつと押し寄せてきました。
迎えに来てくれるかもという淡い期待を持ってあの岩山で結構な時
間を待っていたので、4時間全てさまよっていたわけではないでし
ょうが…。

「ちなみに、シャルさんたち、あとどれくらいで戻ってきますかね
？」

「さあ？でも出て行ってから結構立つしそろそろじゃない？」

そーですかー、と返事をしながら今後のことを考えます。

正確なタイミングやなりゆきは覚えていないけれど、原作で言うところのこのヨークシン編の間にウボォーさんはクラピカくんと戦って負けます。

そしてクラピカくんにわたしの夢をかなえてもらうためには、その場に居合わせるのが一番手っ取り早いと考えています。

だからヨークシンでは一時たりともウボォーさんから離れないようにしようと思っていたのですが、こんな初めのころからつまずいてしまいました。

でもその決闘はもつと終盤だった気がするようないような…

とりあえず、みなさんがかえってくるのを待つしかなさそうですね。そしたら今度こそウボォーさんから離れないように気をつけましよう。

また投げられてりしたらたまりませんし、いつそわたしの縄をウボォーさんの腕にくくってやりますか。

と、なんだか外からがやがやと話し声が聞こえてきました。

「　　おう、団長！今戻ったぜ！」

「あつ、フリンクスさん、それにみなさんもおかえりなさい。」

「あれ？お前なんているの？」

「ちょ、それはいくらなんでもひどいです！」

ウボオーさん奪回部隊が戻ってきました。

でも、肝心のウボオーさんがいないようですが、どうしたのでしょうか？

あ、シャルさんもいない。

それに気づいた団長が怪訝そうに尋ねます。

「マチ、ウボオーはどうした。」

「ああ、ウボオーなら助けた後すぐに鎖野郎とケリを付けるって言うて出てったよ。あとそれにシャルもついてった。大したことじゃないから好きにさせといたけど、問題あるかい？」

「いや、いい。お前たち良くやってくれた。なにかあるか？なにもなければ、あとは適当に休んでくれ。」

え？話を聞く限りウボオーさんがクラブピカくんの所にお礼参りに行ったってことですか？

ま、まずいです、決闘イベントがこんなに早かったなんて！

「は、はい！わたしもウボオーさんと一緒に戦ってきたいです！」

「：そうか、お前がいたか。まあいい、行ってこい。」

「やった！ねえマチさん、ウボオーさんたちどこにいるのかわかりますか？」

「ん、いまシャルの携帯にかけてみるからちょっと待ってな。」

「わかりました！」

よし、団長の了承は得ました。
少し焦りもしましたが気づけばゴールまでもう少し、さあもうひと
踏ん張りがんばらなきゃですね。

「おい、きいたぞ?」

「ん?なんですか、フィックスさん。」

「4時間も迷子になってたんだって?はっ、お前やっぱアホだなあ。」

「なっ!」

がっはっはとフィックスさんが笑いながら話しかけてきました。

アイコンタクト、パクノダさんへ: 失敗。ついつと視線をそらされてしまいました。

フィックスさんはちよくちよく人をからかってくるので教えたくな
かったのに!

「お前1人でいったらまた迷子になるんじゃないやねえか?」

「もう、失礼ですね!そんなことありません!」

それからフィックスさんのからかいはずづき、そこに話を聞きつ
けた一部の人たちもいれて、マチさんの電話が終わるまでみんな
わたしをネタにわいわいと談笑していました。

もう、悔しいやら恥ずかしいやら楽しいやら大変でしたよ…

でも後で気が付いたのですが、わたしがこの人たちと話すの
は、この時が最後、だったのですよね

「シャルサーン、ウボォーさんは？」
「ウボォーならもういったよ。」
「え。」

シャルさんは、とあるボロアパートの一室にいました。なんでも鎖野郎ことクラピカくんの居場所を特定するためにPCが必要だったので、適当なところに押し入ったそうです。かわいそうなことに、この元の住人は玄関あたりにころがってすでに息を引き取っていました。
ご愁傷様です。

「安心しなよ、君が来るのはわかってたからね、やりあう場所の候補を幾つかここで決めておいてもらったから、そこを全部回ればどつかにはいると思うよ。」

「おおさすがシャルさん。抜け目はありませんね！」
「……………まあね。」

カタカタとPCを操作して、簡単な地図をプリントアウトしてくれました。

それを受け取ってそれではいざ出陣です！

「…ちよつと、いいかな。」
「？。なんですか？」

意気揚々と出ようとしていたわたしに、なんだか暗い顔をしたシャルさんが近づいてきます。

「いや、なんだか妙な胸騒ぎがしてね。ウボオーに限ってやられるようなことはないだろうけど、少し不安なんだ。だから、さ……。」
「……え？」

シャルさんはトンとわたしの頭に手を置き、少しかがんで目線を合わせてから続けます。

「君には期待してる。もし万が一のことがあったら、ウボオーのこと、頼んでもいいかな。」
「……。」

……そんなシャルさんの初めて聞く言葉に、初めて見る態度に、思わず固まってしまいました。
旅団に入ってから早いく年、絶対にわたしに対する警戒を解くことがなかったシャルさんが、わたしに大切な仲間を預けるようなことをしています。

今この瞬間、この人はどのような気持ちなのでしょう。か。
疑問に思いますが、わたしには人の心は読めません。

「……そんなもの応えるまでもありません。そう、思いませんか？」
「……そうだね。」
「じゃあ、がんばって。」
「もちろんです！」

そしてわたしは声援を背中に受けて、ボロアパートの窓から深夜の街に繰り出します。

：人の気持ちは読むことのできないわたしですが、自身の心ならさすがにわかります。
今このときわたしの心は、ひどく冷めていました。
わたしのことを信頼するなんて、シャルさんも思いのほかバカだったのですね。

冷めた心を抱えながら、教えられた町はずれの荒野に向かいます。
この先で、クラピカくんはウボォーさんと戦っていることでしょう。
そこは、わたしにとっての虹の根元。すばらしい宝物があることを祈って。

第7話 虹の根元 後編

わたしが目的の場所に着いた時、もうすでに二人の戦闘ははじまっています。

それを岩山の陰から、こっそりと伺います。

わたしは絶が苦手ですが、目の前の相手だけに集中している二人がわたしに気付く様子はありません。

戦況はほぼ互角、それかウボオーさんよりでしょうか。

クラピカくんは強力な鎖でウボオーさんを牽制し、ウボオーさんはそれを避けつつクラピカくんに力強い拳を叩きこみます。

しかし、この拳は防がれて決定打にはならず、しかも防がれた際に碎けたはずの腕はふと気がつけば無傷になっています。

牽制、避ける、衝突、防ぐ。

両者が次第に本気になり、一撃一撃の威力が上がっていきつつ、だいたいそんなことが繰り返し続くこの闘争。

一見するだけならばどちらが勝つかは紙一重なこの状況ですが、わたしはクラピカくんが結果的に勝利を収めることを知っています。

だからわたしはこのまま見学を続けて、決着がついてから、ウボオーさんの仇！とでも叫びつつクラピカくんに殴りかければいい。

強敵との激闘直後の気の立っているクラピカくん相手に能力なしで殴りかければきつとうまくいくはずです。

だからウボオーギン、お前は死ぬ。

「あ、ウボオーさんつかまった。」

どちらかがおこした目くらましの土煙が晴れたとき、そこにいたのは鎖で拘束されるウボオーさんでした。

どうやら、捕獲されたウボオーさんは強制的に絶状態になっているようで、鎖から逃れることは難しそうです。

ああ、これは積みましたね。ほらやっぱりクラピカくんが勝ちました。

「とと、そうとわかれば能力を解いておかねばいけません。」

もうこうなってしまうえば、わたしの出番までもうあまり時間はありません。

クラピカくんがウボオーさん相手に問答をしている間に、自らを締め付ける荒縄を解いていきます。

やろうと思えば一瞬で解けますが、最後までいゆっくりと楽しみながら縄を解いていくのが風情というものです。

死刑台に上る直前には皆、刹那の自由を得られるのです。

「よし、これでさい　　っあ、あああー！ー！ー！」

え？

最後に手首から縄を抜いた瞬間、わたしの口から意図しない大きな声飛び出て、あたりに響き渡りました。

え？な、体が、勝手に！！？

「あ、あ、あああああ、あああああああ、あああああー！ー！」

わたしの体はわたしの意思を完全に無視して唐突に岩陰を飛び出し、奇声をあげながら全力でとらわれたウボオーギンのもとへ突進します。

そのまま驚くほどの速さで二人に迫ると、今まさにクラピカからウボオーギンの心臓へと放たれようとしていた小指の鎖を握りしめる

ことで止め、状況の変化にひるんだクラピカを殴りとばしました。

「っが！な、なんだお前は！」

「うるさい！だまってる！！」

クラピカはかろうじて急所への打撃は防ぎましたが、勝利を確信した直後に現れた新手を前に、戸惑いを隠せない様子です。

わたしの口から出る罵倒を聞き、警戒したまま様子をうかがっています。

そして、その後もわたしの体は、のどは、わたしの意思をおいてけぼりに動き続けます。

「よかった。よかった。ウボォー……。本当に、間に合わないかと思っただ……。間に合って、よかった……。」

「……？。あいつじゃねエな。お前、シャルか？」

「……うん、そう。こいつじゃない、オレだ、シャルナークだ。くそ！こいつは、くそ！！！」

……シャル、ナーク。

操作系能力者。相手に特別なアンテナを差すことでその体の自由を奪う能力を持つ旅団員。

いつアンテナを差したかなんて決まっている。

「こいつは裏切り者だ、ウボォー。こいつはずっと隠れて見てたんだ、ウボォーのことを見殺しにしようとしてたんだ……！」

「……。」

「あぶなかった。こいつの能力のせいで操作がはねつけられてたんだ……！もう少しで間に合わないところだった。なんでこいつが能力を解いたのかは知らないけど、本当に危なかった……！」

「そうか。」

ここに向かう直前だ、アンテナを差したのは。
ウボオーギンのもとに向かうわたしに声をかけるふりをして、信頼
しているように見せかけて、頭に触れた、あのときだ。
ふざけるな。

「くそ！こいつは殺す。あとで苦しめながら殺してやる！拷問はフ
エイタンに任せ…、ってウボオー？なにしてんの？」

「いや、こいつはオレが始末する。」

「え、ちょ、まってウボオー、頭にはアンテ　　つつうが…。」

シャルナークがわたし口を動かしている途中で、ウボオーギンはお
れの頭をその大きな手でわしづかみにした。

ぺきつと音がどこからか聞こえてきたかと思うと、体の自由と、さ
りげなく感じていなかった痛覚がよみがえる。

ウボオーギンはそのまま、片手でおれの体を持ち上げた。

頭蓋のきしむ音が頭に響く。万力のように締め付けられて意識が飛
びそうだ。

「が、や、めろ…。…はな…せ。」

「あん？戻ったのか？まあいい、お前は俺が殺してやる。それがお
前を拾ってきたオレのケジメだ。」

「…っな！」

おい、おい、まで、ふざけるな！

おれは殺されるのか！？ここで！？殺されるのか！！？

この下衆のくさった手であっけなく握りつぶされるだど！？

ふざけるな。ふざけるなふざけるなふざけるな！！！！

こいつに、こいつらなんか、殺されてなんかやるものか！

！！

「…おい！」

「あ？」

きしむ痛みを無理やり抑えつけて、怒鳴りつける。

目をあわせて、最後に一言いわせるとい意思を伝える。

意図を正しく理解したらしいウボオーギンは加える力を少し緩めた。

…馬鹿が。

「もう5年前のことです。あの地獄のなかで、あなたはわたしをさらいましたよね。いまでも鮮明に覚えています。多くの仲間が殺されました。」

「ああ。」

この状況は半ば積んでいる。

「それから無理やり、あなた達の仕事につきあわされてきました。わたしのこの珍しい力でもって。」

「ああ。」

おれの力ではもう、この手を振り払うことはできない。

「わたしは一族の唯一の生き残りです。だから一族の血を残すために今まで耐えてきました。」

「あ？」

ウボオーギンが怪訝な顔を向ける。こいつはなにをいつているのか？と。

「それも今日までというのも侘しいですけど、まああきらめまじょう。…だけど、いいのですか？」

「…。」

そんなものかまいやしない。この短い言葉の中に、布石は積んだ。あとは決定的な言葉を放つだけ。

「これじゃ頭蓋と一緒に潰れます。あなた達の大好きな、わたしの、
緋の目が…！」

「…あ？」

「…っ！…！その手を離せ！」

おれが最後の言葉が響いた直後、いままで様子見に徹していたクラピカが動いた。

事態が思うように動いたことに思わず口の端が上がるのが分かる。

「これ以上、私の同胞を殺させたりはしない！」

「なっ、なんだいきなり！」

クラピカはおれをつかむウボオーギンの腕めがけて中指からのびる鎖をふるう。

それをウボオーギンはすんでのところ避けるが、おれから手を離してしまった。

結果崩れ落ちそうになったおれの体は、駆け付けたクラピカに抱えられ、おれごとクラピカはウボオーギンから距離をとった。

「…だいじょうぶか？」

「……。」

クラピカはウボオーギンを警戒しながら、両手で顔をかくしたおれに声をかけた。

「まだだ、まだ終わっていない。」

おれの勝利条件はウボオーギンに殺される前にクラピカに殺されること。

「ここからさらにたたみかける。」

「…ふふふ。」

「…どうしぐっ！」

とりあえず目の前のクラピカの顔面に頭突きをお見舞いしてやる。

ひるんでいる間に後ろに下がった。クラピカともウボオーギンとも同程度の距離が開くように。

「ああ、せっかくの美系が鼻血のせいで台無しじゃないか。」

「な、なにを…？」

「ふふふ、ははは！まさかこんなにうまくいくとは思いませんでしたあ！」

「…っ！」

クラピカがわたしの目を見て、驚愕の表情を浮かべている。

そこにはなんの変哲もない、ふつつの黒い瞳孔が踊っている。

「あはは、気づいちゃいましたあ？そう！わたしは緋の目なんて持っていないし、ましてやクルタ族なんて弱小マイナー民族の生き残りでもありません！」

「っく！」

「もうあなたってホントに馬鹿なんですなあ。緋の目緋の目緋の目」

緋の目って、そんなに赤い目が好きならつさぎさんでもプレゼントしてあげましょうかあ？」

クラピカはみるみるうちに憤怒の形相をみせ、その目だけでなく顔全体を真っ赤に染める。

そうだ、もつと怒れ。

おれはお前を全力で煽る。焚きつける。挑発する。だから早くその怒りをおれにぶつけてこい！

「そんなんだから、わたしみたいなのに利用されるのですよあ？まったく、そもそもあなた以外に生き残りなんかいるわけないじゃないですかあ。なんせ、わたしが全部殺したのですもの！」

「な、あああああ！」

よし、かかった！

クラピカが怒りにまかせて近づいてくるのを、おれは不遜な笑みを浮かべつつ自然体で受け止め

「てめえの相手はおれだろうが！！」

「なっ！」

「…え？」

え？な、ウボオーギンがクラピカに殴りかかった！？

完全に意識がおれに向いていたクラピカは、何とか防いだものの踏ん張ることができず、荒野の大地を転がっていく。

「…な、なんで？」

「お前はオレが殺す。あいつの片づけが終わるまでおとなしくしてろよ。」

「。。。」

絶句。

ウボオーギン、お前はまだおれの邪魔をするのか。

そしてウボオーギンはさらにクラピカへと追撃に向かう。

そして再度始まるウボオーギン vs クラピカの構図だが、明らかにクラピカの動きが疲労で鈍くなっている。

このままでは早いうちにクラピカがまける。殺される。

「…っ！たすけなきゃ…！」

焦燥に駆られたおれはとにかく立ち上がり、攻防を続ける二人に走り寄る。

くわえて走りながら、どこからともなく取り出したロープで丁寧に上半身を拘束していく。

この状況でおれの念能力が的確かどうかなど関係ない。おれにはこれしかないのだから！

「おうら！」

「…っは。」

クラピカがウボオーギンの拳を避けきれずに体勢を崩した。

ここぞとばかりにウボオーギンはその拳に信じられないほどのオーラを集めるのがわかる。

まずい、ヒックハンインバクト“超破壊拳”がくるか！

さらに手錠もとります。

倒れそうなクラピカの胸をウボオーギンはアッパーの形で狙っている。

おれはそこに割り入ろうとがむしやりに飛び込んだ。

これを、受けきれれば、きっと、おれの、勝ち！

「これで最後だ！“ビックバンインパクト超破壊拳”！」
「…っ、束縛された安全地帯」！
「うっ、ぐあー！！」

ドンっ！！

ビックバンインパクト“超破壊拳”は、クラピカを押しつけたおれの胸をとらえた、その時発せられた音はともじやないがヒトの体同士がぶつかったときに出ていい音ではないように聞こえた。

否、そう感じる暇もなくおれの意識はふっと短い眠りについた。

そして、この場の幕は降りる。

…目が覚めるとビュンビュンと自身が風を切っている音が絶え間なく聞こえました。

あたりを見回すと、そこは夜空のど真ん中です。

さて、どうしてわたしがこんな所にいるかというと、ビックバンインパクト“超破壊拳”をもろにくらったわたしの体は、アップー気味に打ち上げられたこともあり、ロープの尾を引きながら高く早く宙を走っている、という事です。

予想通りとはいえ、着地前に意識が戻ってよかったですね。

それはまるで、先刻ウボオーギンに投げられた時のように、いやむしろ今の方がずっと早く遠くへ風を切って飛んでいるようです。

そこでふと思い出します。

クラピカをかばうまでは本当に時間が引き延ばされたように感じました。

そしてその長い長い時間の中でわたしは一つの奇策を講じたのです。この奇策が成っていれば、クラピカもろともあの場を逃れることができるはずでした。

わたしは自身の後ろでたなびくロープの先を確認します。

ロープの先には手錠がくくられ、その手錠のクラピカの腕がはまっています。

腕に引つ張られたクラピカくん自身もちやんと付いています。

さらに後ろを見ても、すでにウボオーさんは見えませんでした。

よかったです、です。

成功しましたね。

ビックバンインパクト

“超破壊拳”にこめられたオーラをみて、もしかしてまた空を飛ぶ羽目になるかもしれないと感じたわたしは、とっさにそれを逃走手段にすることにしました。

わたしと疲弊したクラピカくんじゃウボオーさんには到底かなわな
いと感じたのもあります。

だから、あの一瞬のなかで、自身につながるロープでくくった手錠
をクラピカくんにはめたのです。

…ロープや手錠はわたしの能力の支配下なのでどんな威力でも壊れる
ことはありませんが、クラピカくんの腕が引きちぎれないかだけが
心配でした。

…みるかぎり意識もありそうですし、大丈夫なようですね。
本当によかったです。

わたしたちはまだまだ、中空を走り続けます。

つと、今気がついたのですが、着地はどうしましょう…？

わたしは能力があればなんとかなるのですが、クラブピカくんは…最悪ミンチ？

うわ、まずい…けどまあクラブピカくんのことですから自分で何とかしてくれるはず…？

…たぶん、きつと、おそろく…。

ちよつと不安になってきましたね。

ああそれならいつそのうちに

「クラブピカくん？きこえますー？」

「…ああ、自が覚めたのか。」

「ええ今さつき。ところでちよつとお願いがあるのですよ。」

「なんだ、この状況のことなら私にはどうにもできないぞ。」

「…あははー。まあそれは後で考えることとして…。」

もうどうにでもなれと言った具合の雰囲気をしたクラブピカくんの、その赤くない目を見つめてわたしは言います。

「ちよつと今すぐ、わたしのことを。」

殺してみてはくれませんか？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9916w/>

だいじなだいじなわたしのぱんつ

2011年10月10日11時16分発行